
黒の幻想、白き刃

腐れ紳士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の幻想、白き刃

【Nコード】

N12420

【作者名】

腐れ紳士

【あらすじ】

友達の巻き添えで異世界召喚。OKOK。ここまでは最近のテンプレだ。自分が勇者じゃないのもOKだ。で、何で俺は召喚国の敵になってるの？主人公は最強キャラではありません。最強キャラが雑魚をばったばった薙ぎ払っていく物語をお好みの方はお氣をつけください。また、残酷描写云々は、やはり冒険で魔物や人の命を奪うことがあるだろう、と言う理由でつけました。また、ハーレム（しかもロリ系）予定です。苦手な方はすぐに避難だ！

その0 プロローグ・召喚

「よくぞきた！ 異世界より訪れし勇者たちよ！」

豪華な衣装に身を包み、豪華な椅子に座って高所から睥睨する王様。その視線の先で言われたとおりの作法に従って礼を取ってる二人の男。つまり俺＋α。

さて、何でこんなことになったんだろうか……？

まあ、まずは自己紹介をしよう。

俺の名は山岸啓太。やまぎし けいたそして隣にるのが幼馴染である藤咲守飛鳥。ふじさき もりあすかと言う。ともに17歳の高校生だ。

飛鳥、と言う名前から女と間違われることが多いが、こいつは立派な男だ。身長175センチ。決して大柄・長身と言う背ではないが、平均よりは確実に高い。全体的に細身だが、腕に触れば筋肉質なのが感じ取れる。今流行の細マッチョと言う奴だ。

ついでに言うなら女顔の美形。クォーターで赤茶の髪がよく目立つ。顔で男を選ぶ女なら、10人中10人が一目ぼれするような美形で、そうでない女も最低でも顔だけは認めると言うイケメンっぷり。……ちなみにしつこいようだがこいつは男である。実は男装少女、なんてオチもない。修学旅行とかで同じ温泉に入ってる。きちんとしてた。

これで顔だけの男なら、それだけで終わっただろうに、この男は実家が古くからある金持ちで古流武術を伝えているとか何とか。飛鳥自身、祖父から剣術を学んでおり、剣道部のエースと呼び声が高い。頭も決して悪くはない。そして見事なまでの善人。

と、これだけ並ぶことから想像つくように、もちろん、極めても

てる。飛鳥自身が潔癖症な面とかプラトニックな面があるため、特に付き合ってる女はいないらしいが。

尤も、この世に完全な人間などはないように、もちろんこいつにも欠点はある。

この男。得意分野は飛びぬけている。いっそ天才と言い切っていだろう。剣術を習ってるせいか剣道では3段を持っている。ちなみに3段は17歳としては実力以前に受験資格の関係で最高位に当たる。4段の受験資格は3段を得てから最低3年後だそうなので、二十歳ごろになるだろうか。取り合えず高校生としては最高位の剣士といって過言ではない。

もちろん、それだけのものがあるのだから、素の運動神経も悪くはない。が、剣道以外のスポーツは「そこそこマシ」程度で、球技の類にいたっては素人のほうがうまいことすらある。

先週の体育のサッカーで、飛鳥がフリー、しかもゴールキーパーすらゴールを離れていると言う絶好のチャンスのゴール前、と言う配置で、この男、盛大にシュートを空振りして転びやがったのだ。ちなみにボールはそのままコート外へ転がって行って、このチャンス逃したせいで負けたのである。

勉強に関してもそうで、こいつはバリバリの理数系。特に数学が得意で、それこそ大学レベルの問題だってすらすら解いてしまう。

だが、語学系は壊滅。特に英語が。このあいだの授業で黒板に“man”の複数形“men”を“mans”と書いて教室を笑いの渦に引き込んだものだ。

要するに。藤咲守飛鳥と言う男は、どこまでも特化してると言うか不器用なのだ。得意なこととはとことん得意で文武両道。でも、苦手なことはとことん苦手。

それが俺の幼馴染、藤咲守飛鳥と言う男だった。

さて。こいつの話ばかりしたが、ついでに俺のことも話しておこう。

身長187センチと大柄で、身長にふさわしく筋肉が発達してる。筋骨隆々、といって間違いいではない。まあ、身体鍛えるの好きだしな。暇があると筋トレしたくなるタイプの人間なんだ。顔つきは：まあ、不細工ではないと信じたい。知人たちから「デカマッチョでシルエットだけなら怖いのに大人しい顔つきだからギャップがすごい」と言う理由で“眠れる罫（ひぐま）”なるあだ名を頂戴している。

勉強運動全般として、まあ、どれもそこそこできる。が、本当にその分野が得意、って言う奴には絶対勝てない。ちなみに喧嘩は得意。飛鳥に勝ったことは1度しかないけど。

昔、子供のころ。飛鳥の祖父に武術の訓練と言うのを付けてもらったことがある。1日だけ。この家の武術は、まさに合戦をくぐってきた「本物」の武術。刀だけではなく、槍、弓、果ては無手の格闘術まで叩き込まれた。

で、散々子供心にも死ぬ、と思うような訓練をさせられた後、爺さんに言われたのが、

「お前は器用じゃが才能がないのう。これで才能があれば我が流派の後継者として志保を嫁にすることも考えるんじゃないが」

である。あの時は項垂れたものだ。

ちなみに志保と言うのは飛鳥の妹で5つ下になる可愛い子だ。つか爺さんよ。俺当時5歳。志保ちゃんは生まれたばかりだろう。嫁は話が飛びすぎだ。まあ後継者に選ばれてないから関係ないのですが！

ちなみに飛鳥は

「お前は剣の才はあるのにぶきつちよじやのう。剣だけなら歴代の

どの当主よりも上になれるだろうに。なぜそれを他の獲物にまわせないのかが不思議でならんわい」

だった。やっぱり項垂れてた。

話を戻そう。

そんな俺たちは、学校帰りに二人で歩いていた。話題は2ヶ月後に控えた文化祭だ。

「で、文化祭なにやる？」

「そうだな。……お化け屋敷とか喫茶店とかが妥当だけどな」

「まあね。でも、それはありきたりだよね」

「そうなんだよなあ。売り上げ1位のチームは学食3万円分が人数分もらえるからなあ。どうにかして客を集めるインパクトのある出し物を考えないと……」

「そうだねえ」

溜息をつく男二人。

他の奴にとってどうかはわからないが、少なくとも俺にとってはこの文化祭の勝敗は死活問題になるのだ。何せうち、先月に親父の転勤が決まってお袋もついていったから現在一人暮らし。録に料理もできないから昼飯は当然学食だが、仕送りとバイト代だけではどうにも厳しいのだ。遊ぶ金なんて本気でない。どうにかしないとなあ。

などと思いながら歩いていたら、突如地面が発光した。ちなみに飛鳥の足元。微妙に俺も片足突っ込んでる。

「は？ なにこれ？」

つぶやく飛鳥。無言だったけど俺も同意見。

足元の輝きは円を基本として複雑な模様を描いていて、そう。たとえるなら魔法陣そのもの。俺も飛鳥も本能的な危険を感じ、飛びのこうとしたのだが足が動かない。

「なななななななんだよこれ！？」

「おおおおおお俺が知るわけないだろう！？」

あせる俺たち。だが、そんな俺たちの焦燥には頓着せぬとばかりに魔法陣の輝きは増し、ついに光は虚空を侵し、円は球となって立体型の魔法陣、とでも言うのだろうか？ そのようなものになって飛鳥を包み込む。

俺はと言うと、右足の膝から下だけ魔法陣の中。立体化した影響で強制的に空中に固定化されてる。

そして。

まばゆい光とともに、俺たちは世界から消失し。

物語の中でしか聞かないような、剣と魔法の異世界に召喚されたのであった。

その0 プロローグ・召喚（後書き）

はじめまして。初投稿です。

至らない点多々あると思いますが、感想・御意見などありましたらいただければ幸いです。また、誤字報告などございますれば全力で修正させていただきます。

ちなみに不定期更新かつろくにプロットも立ててないと言う見切り発車仕様……へへ；

その1 混線事故

その日、少女は師に従って鍛錬室で魔術の訓練を行っていた。

少女、エルメンライヒ王国第四子にして第二王女であるエリシエル・クーニグンデ・クリフォード・フォン・エルメンライヒ―愛称はエリー―は、かつて失われ、今は魔族、神族、そしてごく一部の魔術師しか使えない古代魔術の使い手である。それも、並外れた魔力を持つ才女だ。

……しかし、そんな才能も、制御できなければ何の意味もない。そう、エリーは魔術の制御が極めて苦手だった。

簡単な魔術であれば、制御は難しくない。鍵開け、明かり、通訳、そして魔力砲。この程度の魔術ならば未熟なエリーにも難なく扱える。特に魔力砲の威力は師ですら「手を抜いたら自分がやられる」と言わしめるほど。

他にも、長詠唱で発動する炸裂弾、散弾、貫通砲などが扱える。……おとなしい顔と性格に似合わず、エリーの魔術は攻撃特化であった。

そして、今日エリーが行っていたのは、最も簡単な召喚術。自分の最も近くにいる小鳥を召喚する、と言うもの。

しかし、簡単、とは言ってもそれは召喚術の中では、と言う但し書きが着く。これまで学んだ中では間違いなく最難関になる、極めて制御の難しい魔術だ。

だが、逆に言えば、この術が正しく行使できるようになれば、魔術師としての実力の証明でもあるし、何より自分の制御力の高い上昇が見込める。

そして、エリーは、その術の行使にかつてない手応えを感じてい

た。

（行ける……。これなら……）

自らの意思に従い編まれていく魔術式。朗々と響き渡る詠唱。その声は鈴を転がすように美しく、世界に語りかける歌声は、他人を惹き込むものがある。

エリーは、長い長い詠唱を終え、最後の一息で術を起動させた。刻まれた魔法陣が輝き、部屋中にエーテルを撒き散らす。やがてエーテルは陣の中央へと収束し、ついに爆発するかのごとくまばゆく瞬いた。

あまりの輝きに目を閉じていたが、その目を開ければ、目の前には小鳥の姿が、

……

……

……

「……………あれ？」

何もいなかった。



「まったく。あれだけの手応えで何も起こらないってどういうことなのよ」

1時間後。修行を終えたエリーは、王家専用の風呂に入っていた。湯船に浸かった腰まで届く長い金髪が湯を吸い重くなる。この金髪は、エリーのちょっとした自慢だった。

（この髪にふさわしいスタイルならよかったんだけどなあ）

150にわずかに届かない身長とぺったんこな胸はエリーのひそかなコンプレックスである。

今年で15になると言うのに、いまだに初対面の人間からは3つ、時には5つも幼く見られるのは気分の良いことではない。

（姉様はあんなにスタイルいいのに）

5つ年上の姉の姿を想像する。少なくとも自分と同じ年の頃にはすでにかなりナイスボディだった気がする。ついでに15歳ともなれば、男と違って成長の早い女だ。そろそろ成長期も終わるころだろう。エリーは考えて憂鬱になった。

「……そういえば、姉様の儀式は成功したのかな」

ポツリとつぶやく。エリーの姉、ジャステイン・イザベラ・クリフォード・フォン・エルメンライヒは、今日、魔王軍や他国に対抗する「勇者」の召喚の儀式を行っていたはずだ。

確か、ちょうど自分が修行してるときと同じ時間の予定だったはずで。当然、結果はもう出てるはずだ。

「上がったら聞いてみようかな」

多分失敗はしていないだろう。あの儀式は特殊な魔法装置の補助を受けている。と言うか、実質召喚を行うのは魔法装置であって、術者はその起動役に過ぎないのだから。

エリーは身体を洗おうと、湯船から立ち上がった。そのときである。ヴヴヴ、と言う耳鳴りを感じ、エリーは周囲を見渡した。

「……何の、音？」

曲がりなりにも一国の姫であるエリーは、命を狙われる可能性がある。その可能性を意識し、エリーは周囲を警戒した。そして。

真上から、馬鹿でっかい何かが降ってきた。

「んみゃあ!？」

見事に「何か」と衝突し、湯船に沈むエリーと何か。沈んだ拍子に水を少し飲んでしまい、めっちゃくちゃ苦しい。

エリーは咳き込みながら、自分にのしかかる「何か」に目を向けた。

男だ。

それも、17、8くらいの少し年上の男だった。

背はかなり高い、って言うか見るからに鍛えられた筋肉とあいま

って、筋骨隆々とか熊みたい、などのような表現が似合っている。毛深いわけではなさそうだが、黒髪だしさしずめ黒熊だろうか？

しかし、そんなことはどうでもいいのだ。要は、その男が、今自分にのしかかっていると言う事実が問題なわけで、あれ？　今私どんな格好してたっけ？

「……」

胸元から、うめき声がした。

男が、落下のショックで失った意識を取り戻したようだ。

マテ。

イマ、コノオトコハ『どこ』ニカオヲウズメテイル？

「む……こは……」

むに。

男が、起き上がるためだろう、手を着いた。

今まで顔をうずめていた、エリーの胸に。

⋮

⋮

二人の視線が、ここで始めて絡み合った。

取り合えず。

「きやあああああああああああああああああああああ

!?
」

エリーは思いつき悲鳴を上げ、目の前の痴漢——山岸啓太の頬を思いつきりひっぱたいた。



……気まずい。

何が気まずいか、など言うまでもない。

どんな経緯があったのか。よくわからないが、取り合えず気がついたら入浴中の12歳くらいの女の子に抱きついていたのだ。しかも胸に顔をうずめて。しかも起き上がりとして思いつき手で触っちゃったし。

眼福だったのは認めよう。俺も男だ。尤も、さすがにぺったんこすgげふんげふん。

そうではなくて。そのせいで、とても気まずいのだ。

女の子が悲鳴を上げたら、すぐに女騎士、と言う風貌の人がやってきて、俺をあつさと拘束。牢屋まで連れて行かれた。さすが騎士、抵抗の余地もなくあつさと牢屋に入れるとか凄腕なのかもしれない。なぜか1時間位したらすぐに出されたが。

理由を尋ねたのだが、兵隊さんの言葉がわからない。一応お袋の主張で英会話塾も通ってたんだが、英語とかじゃないらしい。何語だ？

で、さっきの女の子のところまで連れて行かれた。ここで、冒頭の気まずい、まで戻るのだ。

事故（だ）と思う、さすがに）とはいえ、あんな破廉恥なまねをし

た奴が、被害者に何をいえばいいと言うのだろう。そもそも言葉通じないし。まあ、それでも誠意を持って謝ることからはじめてみるべきか……

と、やおら女の子が何かを言い始めた。だが、それは俺に対する呼びかけではない。槍を突きつける兵士達へのものでもない。歌うような、つぶやくような美しい旋律。可愛らしさと美しさを兼ね備える彼女の容貌とあいまって、妖精の歌声、などと言う柄にもないフレーズがよぎった。

「あの、私の言葉、わかりますか？」

「……へ？」

いかん、見惚れてたようだ。気がついたら女の子が上目遣いにこっちを見てる。……やばい、そんな気はないつもりだったが、これだけの美少女にそんな目で見られると、ロリコンに目覚めそうだ。

「あ、ああ。聞こえてる。……って言うか、何でいきなり会話が？」

「それは、私が通訳の魔術を使ったからです。この魔術は術者自身が知らない言葉でも会話が通じるようにするもので、他人にかける魔術ではないので、あなたは私としか会話はできないのですけれども」

はい？ 魔術？マジック？手品？痛い妄想？

ぶっちゃけ信じらんねえ。なんだって魔術なんてファンタジーがでてくるのか。ただ、今の会話が急に通じるようになったこと、謎の移動、その直前に見た魔法陣。これらのキーワードは、魔術、なんていう非科学的な概念を持ち込めば、納得できてしまうものでもあった。

「……あー。やっぱり異世界の方だと魔術とかいってもわからない

ですよね。わかりました。一番最初から改めて話しますので、聞いていただけませんか？」

「……わかり、ました」

顔に出てたらしい。よくわからないけど、説明があるならまあいいか。

「まず、一番最初にお話しないといけないのは、信じられないかもしれないんですが、ここは今まであなたが暮らしてた世界とは別の世界、つまり異世界、と言うことになります」

はい、いきなり着いていけない言葉が出ましたよ！

「ああ！？ そんな胡散くらしいものを見るような目で見ないください！ しょうがないじゃないですか事実なんですから！ 取り合えず今は『信じられないけどそういうものなんだ』とでも思って聞いてください。」

……こほん。

話を戻しますけど、ここは異世界です。なぜ貴方がいるか、と申しますと、我々が呼び出したから、と言うことになります」

「呼び出した？ なんでまた？ それにどうやって？」

「はい。現在、この世界は極めて危険な状態にあります。魔族と呼ばれる化け物の侵攻、人間の国家間での争い。さらには国内でもどこの国にも内乱の種がある、といわれており、気を休める余裕もない状態。」

これを解決する英雄として、伝説の勇者を異世界から召喚する、と言う儀式を行ったのです」

……オーケーオーケー。魔族とか言うものの存在は、「取り合えずそういうもの」で納得しよう。異世界に呼び出されてるのが事実

なら、そういう儀式があるということも納得しよう。
だが。

「化け物の侵攻、国家間の問題、内乱の種。これを全部解決するために呼び出された？ 俺一人で何ができるって言うんだよ、それ」

「……え、え」と

「……ん？ ちょっと待った」

「はい？ 为什么呢？」

「いや、俺はその儀式で呼び出されたんだよな？ ならなんで俺は風呂なんかにな？ 君もはd「忘れてください」……はい」

弱っ！ 俺弱っ！

い、いや仕方ないじゃないか！ まだこんな小さな子供とは言え乙女は乙女。忘れろというなら取り合えず触れないのが紳士の嗜みって奴に決まっている！

まあ、記憶削除自体は無理なんですが。

「それで、そこなのですが。実は、勇者として呼ばれたのはあなたではない、と言う可能性が高くて、ですね」

「はい？」

「実際に儀式が行われていた当時、私も別に召喚の魔術の練習をしていたんです。師匠がおっしゃるには、それがおかしい感じが混線したんじゃないかってことなのですが。儀式ではきちんと赤茶の髪の毛の勇者が呼び出されたと聞きました。

ただ、召喚者である姉様が言うには、その勇者様は「その召喚と一緒に友人も巻き込まれた」とのこと……」

ああ。つまりあれか。馬鹿飛鳥に巻き込まれて俺の平和な日常ライフさようならですか。

あんにゃろう！ またか！ また俺を揉め事に巻き込むか！

飛鳥はトラブルメイカー、と言うか。巻き込まれ體質らしい。昔から何かにつけて揉め事に巻き込まれていた。あいつ自身が原因になったことはないし、大義は基本あいつにあったのだからあいつを責めるのは筋違いなのはわかってるんだが……なぜそれにいつも俺が巻き込まれるんだ！

「……あいつが勇者なあ。納得できるといえばできるんだけど」

あいつ無駄に正義感高いからな。ただ、あいつ不器用だしそこまですぐにかできる完璧超人じゃないと思うんだが……まあいいや、がんばれ。

「ただ、ですね。混線をした、と言うことは、召喚する過程であなたと勇者様が入れ替わってしまった可能性もあるんです。なので、勇者様とあなたと、ともに選定の儀を受けていただければ、と」
「えー」

いいよめんどい。勇者とかなっても責任重いだけだろうし。大体俺は勇者と呼ばれるほど強くねえし。まあ、色々やってはいる。剣道、空手、柔道、ボクシング、弓道。色々やってたし、喧嘩慣れもしてるから素人よりはましだろうけど、多分そこにいる兵士さんにも勝てねえんじゃない？

その点飛鳥は剣の腕が立つ。数字上の段位こそ3段だが、その実超高校生級だ。基本善人だし、見栄えもするし。

「と、言うわけであいつにやらせておけよ。大体やっても得るものもないんだろ？」

「いえ、真実勇者様なら国を挙げての前面的なバックアップも出ますし、大抵のわがままは通ると思いますけど」

「……お金とか？」

「ええ」

「よし、やろう」

馬鹿馬鹿しいとはわかってるんだよ！
でも貧乏人には大切なんだ！

その1 混線事故（後書き）

ちなみに、この異世界の王侯貴族の名前は、（自分の名前）・（母の名前）・（父の名前）・フォン・（家名）と言う設定になっております。

なので、エリーは、「王侯貴族であるエルメンライヒ家のクリフォードを父に、クーニグンデを母に持つエリシエル」と言う意味を持ちます。

平民の場合は人によって大きく異なり、ある程度裕福であれば貴族称号である“フォン”がないだけで貴族と同じであり、そこまで裕福でなくとも大半の平民は両親の名を継ぎます。ただ、両親を知らない子供、あるいは継ぎたくない人などもおり、そういう時は名前のみを名乗るわけです。

以上、多分役に立たない雑学でした！

その2 選定の儀

「それで、選定の儀って何？」

「ええと、ある人物の魔術的な才能を調べる儀式です。その人が持つ起源属性とか魔力量とかがわかります」

「ふむ。それで勇者の属性とかがわかるってことか？　ところで起源属性って何？」

「ええとですね。起源属性って言うのは、生まれ持った魔術的な相性のことです。大まかには火、水、土、風の四大属性で表されますが、人によってはさらに細分化されたり、四大に含まれない特殊属性を持つこともあります。」

たとえば、私は風属性です。それで、魔術を行使するに当たっては、自分の属性の魔術が最も習得しやすいんです。ただ、別属性の魔術の習得が不可能、というわけではありません。そこは努力と才能次第ですね」

「ほうほう。それで、勇者だったらどうなるんだ？」

「確実に勇者だ、と言う保障のある属性は、実はありません。おそらくは光属性だろう、と言う見解が一般的ですが、過去の勇者様には火属性とか土属性の方もいたそうです。ただ、比べてみれば「より勇者らしい」と言うものはでると思うので」

はあはあ。なるほど。

しかし、異世界人である俺たちが起源属性？　なんて物を持っているのだろうか？

「過去に呼び出された異世界の勇者はあなたたちだけではありませんから」

実例で証明されてるのか。

「なるほどな。ところで、特殊属性ってどんなのがあるんだ？」

「そうですね。有名なところで言えば、雷、冷氣、光。闇属性と言うのもありますが、純粋な人間にこの属性の持ち主は聞いたことがありません。魔族との混血、とかならばいるのですが。」

後は———全特化」

全、特化……？

「はい。その名のとおり、およそ全ての属性に対し高い適正を持つ、最強といって過言ではない属性です。記録上にこの属性を持つと記されているものは、すべて歴史上にも名を残す大魔術師です。」

神話の時代に神の祝福を受けた聖女ダニエラ。竜殺しの英雄シンシア。100の軍と単身渡り合いしジャイルズ。そしてわが国の創設者ロベルティーネ。

彼らは、炎の爆発を、大地より隆起する氷の刃を、三つ又の雷撃を、不可視のかまいたちを。見事なまでに使い分け、敵を翻弄したといわれています」

「それは……すごいな」

「ええ。まさに伝説の英雄たちです」

「ところで、話を戻すけど。選定の儀が何を調べるものなのかは理解した。で、俺は何をすればいいんだ？」

「ええとですね。そのための専用の部屋があるんです。そっちに言って説明します、といっても、基本的にあなたは座ってるだけでいいんですけれども。儀式魔術を行うのは私ですから」

なんだ。小難しい手順を覚えろとか言われたらどうしようかと思っただけ、それなら楽でいい。

……あれ？　そういえば。

「あの？　どうかしたんですか？」

「いや、いまさらだけど、大事なことを忘れてた」

「大事なこと、ですか？」

「うん。俺は山岸啓太。君は？」

「あ……」

この子もそのことを忘れていたのだろう。あっけに取られた表情をした後、次に見せた表情は、凜とした眼差しで、まるで物語に出てくる誇り高いお姫様のようだった。

「自己紹介が遅れ、申し訳ありません。我が名はエリシエル・クーニグンデ・クリフフォード・フォン・エルメンライヒ。このエルメンライヒ王国国王クリフフォードが第四子でございます」

……ってモノホンのお姫様かよっ！

「お姫様……敬語とか、必要でしょうか？」

「いえ、プライベートでは不要です」

「“プライベートでは”、ですか」

「はい」

つまり、公の場では相応の態度を取ってことだ。まだ幼いのに、公私の区別をつけることを知っているのは尊敬に値する。

「それで、け、け、けい、ケイタ？」

「それじゃあ毛板だし。啓太」

「け、け、け……けみびゃ!？」

おお。おかしな発音の次は舌噛みおったよこの娘さん。痛そうだ

けど半泣きの顔が可愛らしい。……いかん。ロリコンの次はSに目覚めそうだ。

「大丈夫か？ 言いにくいなら“ケイ”でいいぞ」

「え、えーと、ケイ？」

「うん。ケイならまだ言いやすいだろ？」

「はい。それではケイト。私のことは普段はエリーでかまいません」
「了解。しかしエリーはしっかりしてるな。まだ12歳くらいだろ？ それなのに偉いもんだ」

「……………」

ん？ 何でいきなりエリー嬢はうつむいて肩を怒らせてるんだ？
なんか背中からごごごごご……なんて擬音が聞こえてくるぞ。

「わ、私は15です!!」



お城の廊下を歩きながら、エリー姫と並んで選定の儀の間（仮称）へと向かう。

しかし、エリーは15歳なのか。どう見てもそうは見えない。背も低いし胸も平だし。つか15ではえー何を想像してるんですか？ ケイ♪」……イエ、ナンデモアリマセン。

お姫様は読心術も使えるようだ。記憶の中のぱい「ケイ？」……ごめんなさい。

しばらくして、件の部屋に到着した。

幅だけで5mはあるだろう両開きの扉を部屋の前にたっていた歩
哨が開ける。

「ありがとう。しばらく彼の選定の儀をするから、誰も入れないで
頂戴」

「\$%！」

多分、「はっ！」とでも答えたのだろう。俺にかけられた通訳の
魔術はエリーとの会話専用なので、さっぱりわからないが。

中に入ると、そこは大きくも暗い部屋だった。

壁にかけられた蝋燭しか明かりがなく、その蝋燭も部屋を照らす
と言うより、蝋燭の周りだけが見える程度。これでは明かりと言う
よりは部屋の闇を拡大させるだけの役割しかないようだ。

「こちらへ」

エリーに手を取られ、連れて行かれる。蝋燭の位置から判断して、
多分、部屋の中央。

「ここに座って、気を楽しんでください。リラックスしてくれば、
後は私が全部やります」

「わかった」

その場に胡坐をかき、気分を落ち着ける。ほとんどが闇の世界だ
が、目が慣れるとエリーの綺麗な青い瞳が見えるようになってきた。
そして、エリーが再び、歌うように呪文を唱える。

その呪文に合わせて床に刻まれていた魔法陣が淡く点滅する。

美しい歌声、輝く魔法陣。闇の世界と、その中に浮かぶ鮮やかな瞳。

俺は、いまだに魔術だの異世界だのを頭から信じたわけではない。ないのだが、この神秘的な美しさを見ると、信じてもいいかと思ってしまう。

しばらくして、歌声がやんだ。

「……反転属性、ですね」

反転属性？　なにそれ？

「反転属性と言うのは、極めて珍しい起源属性です。有名と言うほどではありませんが。先ほど話した“全特化”も、反転属性だけは扱えなかったといわれています」

「チートっぽく聞こえるけど」

「……ほかの魔術に対しては強力なカウンターとなりますが、魔術を使わない相手に対しては基本的に無力な属性なんです。相手の属性と真逆の性質を持つ魔力を放って、相殺できる、と考えてください。ただ、相性の関係でまず結果は力勝負になります。お互いが相殺しあうのですから、より力のあるほうが打ち勝つんです」

「……微妙だな、それ。それで、これって勇者としてどうなの？」

「……その、御友人の方は極めて強力な光属性だったと聞いておりますので……」

ああ、そりゃ飛鳥が勇者決定だな。

「とりあえず、上への結果報告ですが、反転属性と言うのは隠した方がいいと思いますので、火属性と言うことにしましょう。火属性は最もノーマルな属性と言われている、保有者の比率が高いので、

勇者と言う特別性からは最も遠いと思われます」

「ちよつとマテ。なんで反転属性は隠さないといけないんだ？」

「ええとですね。反転属性っていいイメージないんですよ。自然の象徴である四大、希望の象徴である光。さて、これらを打ち消す力、ってなんだろう、ってことでして」

「……魔王とか持ってそーな力だな、おい」

「はい。実際には闇の力も打ち消せるはずなんですが、反転属性の術者が魔族と戦った記録がないので、そういう悪印象が浸透しちゃってるんです。

……それに、過去に確認された反転属性もちって基本的に犯罪者が多いんですよね」

「What？」

「起源属性に引かれて、人間性とか社会性とかまで“反転”しちゃったんじゃないか、なんていう学説もあるんです。証明された説ではないんですけど、それなりに有名でして」

何と言うか。取り合えず俺の属性は秘密にしないと駄目だな、うん。

その2 選定の儀（後書き）

属性についてはエリーが語ったとおりの設定です。

理論上、自分の属性以外の魔術も習得可能ですが、きわめて高度な訓練が必要で、実際に行える人はかなり少数になります。

普通の魔術師で1属性。2属性使えば在野では一目置かれます。3属性にも至れば、取り合えず貴族たちのお抱え魔術師に、と言う声がかかるでしょうし、宮廷魔術師すら狙えるレベル、と考えてください。

当然、自分の属性以外の力はかなり下がるのですが。

こんなあたりから、全特化属性のチート具合を連想していただければ幸いです。

……しかし、あとがきで設定ばかり書いてるな。いつそ開き直ってあとがきは設定コーナーにでもするか。

その3 謁見

「なるほど。確かにここは異世界だ」

そして夜。エリー姫の計らいで客間を与えられたのだが、窓から外の見てみれば、天頂に輝く二つの月。ここがプラネタリウムでもない限り、地球でないことは疑う余地がない。そして今見てるのは本物の空だ。

「めんどくせえ……。取り合えず、飛鳥が勇者なのは選定の儀から言って確定で、ここは剣と魔法のファンタジーと。ついでに魔王だけならゲームの世界なのに国同士のごたごたとか国内の不穏分子とか内憂外患もいいところじゃねえか」

どうせ誰も聞いてないし、この世界の人間はこっちの言葉がわからない。聞かれても関係ねえので堂々と愚痴をこぼす。飛鳥とはまだ会ってないが、むしろこれを聞いて文句言いに出てくるならちようどいい。ぶん殴ってやる。俺を巻き込むんじゃねえ！

ついでに、選定の儀の後に聞いてみたことを思い返す。過去にも呼び出された勇者がいるのなら、元の世界に帰る方法はないのか？

正直こんな危険地帯に長居したくないのだが、と。

返事はこうだった。

「申し訳ありません。過去の勇者様は全員この世界に残り幸せに暮らしたと記録に残されています。なので、その。帰還の術式、と言うのが、あるいは存在するのかもしれませんが、私たちには記録が残されていないのです」

と、言うことらしい。勘弁してくれ。ただでさえ面倒な状況なのに逃げ道すら不明ですかそうですか。物語だと魔王を倒すまで帰れないとかお約束だけど実際になってみると問答無用で暴れたくなる話だ。

「――取り合えず、まずは元の世界に変える方法を探さないと、な。この国もきな臭いし、あんまりいたくない」

こうして、召喚初日の夜は更けていった……



「よくぞきた！ 異世界より訪れし勇者たちよ！」

豪華な衣装に身を包み、豪華な椅子に座って高所から睥睨する王様。その視線の先で言われたとおりの作法に従って礼を取ってる二人の男。つまり俺と飛鳥。

つまりここでプロローグ冒頭まで話に戻るのだ。ちなみに俺たちの会話は、この国の筆頭宮廷魔術師と言う人が誰とでも会話ができるようにする特殊な魔術をかけたそうだ。

この魔術のおかげで特定の個人とではなく、俺たちは誰とでも会話ができるようになった。だが、この魔術はきわめて難易度が高く、さらに持続時間も短いらしい。

さておき。

「異世界よりの勇者・飛鳥。そしてその従者・啓太よ。おぬしらは我が国のために身命を賭して魔王を倒す覚悟はあるか？」

「だが断る」

即答してみた。ざわっ、と国王配下の兵隊さんや文官さんがざわめく。横にいた飛鳥も信じられないって顔で見てた。まあ、当然なんだが。

「し、失礼いたしました陛下！ 彼はまだこの世界の礼儀に疎く！ もちろん魔王退治の任は受けさせていただきますので！」

なんか飛鳥が頭を下げてる。まあ、こいつのことだからどっちにしろ受ける気だったのは理解できるが、俺のことでこいつに頭を下げさせるのは気が進まないし、俺が巻き込まれる流れなのでどうかしないかな。

俺は片膝をつき、頭を下げて、臣下の例のポーズを取る。

「無礼な口の聞き様、大変失礼いたしました、陛下。しかしながら、私はこのたびの命を受けることができません」

「……理由を聞こうか、従者よ」

「まず第一に、私は勇者飛鳥の友人ではありますが、従者ではありません。彼が勇者となったからといって、私まで従う道理はないはずです。」

第二に、選定の儀の結果、私は特別な才能はなく、また武芸の心得も一般兵と比べてすらないでしょう。戦力として数えられるとは思えません。

そして第三に、私は私の意思を無視して無理やり召喚したもののために命を賭けることなどできません」

また場がざわめいた。多分最後の理由について反応したのだろう。王家への暴言と取られてもおかしくないし。

「……そうか。だが、おぬしの身分は、我が娘エリシエルが召喚した勇者、ないし勇者の従者として保障されたもの。魔王討伐の任に加わらぬとあれば、これを保証する理由もなくなるのだが、それはどうするつもりだ？」

「勇者の召喚は、勇者当人の意に関係なく無理やり呼び出されたもの。全ての責を、とは申しませんが、せめてこの世界で人並みに暮らせるよう便宜を図っていただきたいのですが」

「……具体的には？」

「この世界の歴史や常識、言葉や文字など、必要最小限の教養の訓練と、その間の生活の保障をお願いいたします」

過度な要望だろうか？ 俺はそうは思わない。なにせ、国を救う勇者の召喚、と言えば聞こえがいいが、見方を変えれば国家レベルで誘拐拉致をしてるようなものだ。生活保障ができないならとつとと家に帰せと叫びたい。

「勇者殿はどうお考えか？」

「私は、異世界から来た人間ではありますが、やはり無辜の民が苦しんでいると言うのなら、やはり助けたいと思います。ましてや、幸運にも、自分にそれをできる可能性があるのなら、私は微力を尽くすことに異存はありません。」

ただ、啓太は巻き込まれただけの人間。共に来てくれないのは残念ですが、できるだけ汲んでいただければと思います」

ああ、友情がありがたい。こいつのあほさ加減はいつものとおりだが、それでも俺のフォローまでしてくれるのは……なんか借りを作ってみたいで腹が立つな。

くそっ！ この借りは倍にして返してやるからなっ！

「……勇者殿が旅立つまで、しばしの時が要ろう。勇者殿にも、この世界の言葉や文化を学び、武術の鍛錬を受けてもらう必要がある。勇者殿が旅立つまで、と言う条件ならば、啓太殿の望みもかなえよう」

おお！ ラッキー！ 何でも試してみるものだ！

こうして、召喚勇者改め王宮付き生活保護者（期限付き）が誕生したのだった。



「で、何であんなこと言ったんだよ」

「何だって言われてもな。あれは当然のことだろう？ 見方一つであれは国ぐるみの誘拐じゃないか」

謁見が終わり、廊下を歩く俺と飛鳥。話題はもちろんさっきの謁見の間での話だ。

「まあ、そういう見方もあるけどさ。困ってる人がいるんだから、こう、何と言うかだね」

これである。そもそも、自分たちの世界のことなんだから、自分たちで軍を作って討伐なり何なりすればいいのに、わざわざ異世界から召喚する辺り、どう見ても使い捨ての人材ではないか。

まあ、こいつにそういう視点を求めるのは無駄の極みなのだが…。

「まあまあ。大体、俺なんか連れて行っただって足手まといだろ」

「そうかな？ 啓太も色々やってるじゃないか、武術」

「俺のあれはせいぜいけんか用だ。爺さんにも言われただろ昔、才能はないって。そりゃあがんばればそこそこはいけるようになるかもしれないけど、俺はゲームなら序盤は汎用性が高くて重宝されるけど中盤以降は戦力不足で酒場行きになるタイプだよ」

「そうかなあ？」

「そうだって」

「……まあいいけど。それで、どうするの？ ここで色々学んで、永住するの？」

「いや。……お前さ、帰る方法については何か聞いてるのか？」

「……うん。あ、でも、俺を召喚したジャスティンって人はいいで、終わったら一緒に帰る方法を探してくれるって」

「そうか。俺はそれを探しに行くつもりだ。お前は魔王を倒して、俺はそれが終わったらすぐに帰れるように準備をしておく。OK？」

「う、うん、OK」

と、こんなわけで、二人の役割分担が決まった。



翌日から、俺と飛鳥の勉強が始まった。

飛鳥は勇者だし、俺を抱えるのもお金がかかるから、国としては

さっさと出発して欲しいところだろう。厳しくされる、と思った方がいいだろう。さて、先生は……

「で、何でエリーがここに？」

「私がケイの担当ですから」

なぜだ。

「お父様が、私が呼び出したのだから私が責任を取れと」

なるほど。つか、お姫様だろ？ 俺みたいなどこの誰とも知らない馬の骨の相手をさせていいんだろうか？ どう見てもおこちゃまだが、同時に比類なき美少女だ。俺はぼんきゅぼんのお姉さんが好みなので、まったくその気はないが、まかり間違って襲われる可能性とか考慮してないのか？

と、思ったら、背後から殺気が。振り返ってみたら10人近い兵士がずらっと立っている。

……なるほど、対策は完璧でしたか。

「さ、それでははじめましょう。ケイがきちんと生活できるように、びしびし行きますからね！」

追記。お姫様のお勉強は、高校の授業と比べると笑ってしまうほどスパルタだった。

その3 謁見（後書き）

さて。前回ここを設定コーナーにすると行った舌の根も乾かぬうちに、今回本編の内容から話題にできる設定がないです。

とりあえず、主人公啓太と飛鳥のスペックでも。

まず基準値として、心得のない一般人をレベル0、正規の訓練を受けて一人前の兵士をレベル3、家柄やお金ではなく、実力で得た「本物」の騎士で最低レベル5、レベル10を超えたら世界レベルの実力者、と仮定してください。実際にこのレベル表現は本編のキャラクターたちの間では使われません。

ちなみに、このレベル10を超えたキャラクターは、ネームドクラス、と呼称されます。これは本編内で使われる表現。

世界のどこに行っても通用する二つ名を持つ英雄クラス、という奴ですね。

啓太は、レベル2に相当します。大体「チンピラごろつきよりは強いけど正規兵には勝てない、ごろつきの中にいる“兄貴”」クラスです。

飛鳥は、レベル4に相当します。熟練の兵士と互角に戦えるレベルですね。

ただ、飛鳥の場合、剣術、それも西洋剣ではなくて日本刀の技術に限定されているため、武器を用意できないと啓太にも勝てないでしょう。

でも啓太が飛鳥に勝ったためしはありません。なぜなら素手の飛鳥とはやってないから。書き忘れていたのですが、飛鳥は剣道部員なので普段から竹刀と木刀の入った竹刀袋を持ち歩いてます。いい

から盗め、啓太。

ではアデュー♪

その4 修行開始

「んあ？ 武術を教えろ？」

エリーの教育が始まって早一週間。いつものようにしごきの午前を終え、兵士が使用する食堂で飯を食べている。午後はエリーは公務があるとかで、ぶっちゃけ暇だ。

なのでまあ、目の前にいた兵士隊長のグスタフさん32歳男性に話しかけてみたのである。で、その返事がこれ。

「はい、私は、いつか城を出ます。旅をするつもりです。だから学びたいのです」

我ながら、直訳したかのような言葉になってるのは理解できる。片言もいいところだろう。だが、一週間で片言でも話せるようになったのはむしろ褒めてほしいところだ。

グスタフ隊長も、俺が異世界人であることを知っている。だからしゃべる速度を落として、聞きやすく話してくれた。

「なるほどな。まあ、折角の異世界からの客人だし、他の兵士に混じっての訓練でいいならかまわねえが……甘く見ると、死ぬぞ？」

本気だった。本気で甘く見て参加する程度なら殺す、と。何よりも目が語っていた。

グスタフ隊長の名前は、会話の練習を兼ねて兵士たちと話していたときに聞いたのだ。曰く、傭兵上がりで武術の腕は確か。貴族に敬意を払わない性格のため兵士隊長などと言う地位についているが、貴族に取り入ることができたなら騎士団長にもなれたかもしれない

実力者らしい。

剣を取っては天下無敵、槍を取っては生涯不敗。無手になっても剛力無双。そんな人物の「本気」。ぶっちゃけもらしそうなくらい怖い。

だけどもあ、ここでそうですかと引くわけには行かない。こっちもこの先の人生がかかっているのだ。何せ街を一步出れば魔物に何時遭遇するかわからないデンジャラスファンタジーなのだ。身を守るくらいはできないといけない。

「甘く見ません。がんばります」

「……いいだろう。飯を食ったら訓練場に行くぞ」



甘く見てました。

本気で死ぬ。やばい。助けて。

「おら！ 立ちやがれ！ その程度で根を上げて敵から生き延びれると思ってるのか！ 3つ数えるうちに起き上がれ！ できなきゃ止めをさすぞ！ 3！ 2！」
「起きます！」

あわてて起き上がって剣を構える。

足元はフラフラである。つか、剣って重いのだ。飛鳥の家に日本刀があったし、剣道もやってたので、刀の使い方は多少わかるの

だが、西洋の剣って初めてなのだ。

おかげで調子が狂う。いや、グスタフ隊長が鬼教官だけなんだろうけど。

「よし。じゃあもう一本行くぞ！ 死ぬ気で耐えろ！」

「はい！」

さ、また死んでくるか。



「よし、今日はここまでだ」

「ありがとう……ございました……」

ばたり。山岸啓太は死んだ。〈f i n. 〉

いやいやいや！ まだ生きてるから！ 本気で死ぬかと思ったけど！

「しかしあれだな。お前器用だな」

「そうでしょうか？」

「ああ。初日に剣、槍、馬。色々やらせたけど、そこそこついてくれるんだものなあ」

「ありがとうございます」

「だがまあ、才能はないな。多分どれもいい線は行くが、そこ止まりだ。お前の場合、武器を大量に持ち歩いて状況や相手に切り替え

るほうがうまく機能するかもしれないな」

そうなのか。つうか大量に武器持ち歩くってすごい重そうなんですか。

「まあ、体は鍛えてあるし、ばねも悪くない。ガタイもいいからちやんと鍛えれば十分いけるだろうがな。なんにせよ先の話だ」

ふむ。手を変え品を変え、か。そこまで武器を用意できれば、だな。



余談だが、飛鳥の奴は数日前に王家に代々伝わる光の勇者の剣とやらを正式に継承したそうだ。

銘はエクスカリバー。ちなみに岩に突き刺さってた。どう見てもアーサー王伝説です本当にありがとうございます。

この剣は、光の起源属性を持つものだけが抜けるらしいのだが、それだけでは抜ける盗人とかが現れるかもしれないと言うことで、封印の魔術がかかっているとか。

その魔術は宮廷魔術師長にのみ代々伝えられる特別な魔術で、国王の出す正式な命令書によってのみ使用が許可される。さらにその魔術は神に使える純潔の巫女の血を数的触媒とするのだとか。

ちなみに今回の巫女さんは飛鳥を召喚したエリーのお姉さんであるジャスティンさん。二十歳のぼんきゅぼんなお姉さんで、ぶっちゃけすごい好み。でも彼女は飛鳥に一目ぼれしたらしく、かいがい

しく世話を焼いている。

くそう！　これは涙じゃない、心の汗なんだ！



Side…飛鳥

最初の王様との謁見から2日後。僕は再び王様の前にいた。ただ、今いるのは謁見室ではなく、お城の中庭だ。

「それではこれより！　かのもの、飛鳥・藤咲守を光の勇者と認め、ここに王家に代々伝わる神具・エクスカリバーの授与を行う！　皆は知ってると思うが、エクスカリバーは歴代の勇者の手に渡り、魔王を倒してきた由緒ある聖なる剣だ！　皆の者、新たな勇者に祝福を！」

わああああああ、と割れるような大歓声。正直くすぐったい。まだ何もしてないのにな。

「では巫女・ジャスティンよ、エクスカリバーに祝福の血を」

王様の声に応え、ジャスティンはナイフで自らの手首を浅く切り、そこから流れる血が剣を濡らす。

ところで、僕は日本刀を扱う剣術は習っているが、このエクスカリバーはどう見ても刀ではなく剣だ。これから習うのだろうか？　あんまり器用なタイプじゃないので、慣れないものをうまく使いこ

なせる自身がない。

ジャスティンが血を流したのにあわせ、宮廷魔術師長であると言
うお爺さんが呪文を唱え始める。呪文は数分続き、唱えきった途端
エクスカリバーが閃光を放った。

「これにて、エクスカリバーの封印はとかれた！ さあ、勇者・飛
鳥よ！ 剣を取り、受け継ぐがいい！」

ようやく僕の出番だ。しかし、光属性だとか言われても、別にな
んか光の魔術を使えるわけでもない。これで抜こうとしたら抜けな
かった、とかなになったらしい笑いものだなあ……。

そんなことを思いながら剣の柄に手をかけ、ゆっくりと引き抜く。
ごごご、と言う鈍い音がして、思ったよりも簡単に抜けてゆく。
周囲から、おお、と言うどよめきが広がった。……あんまりすごい
ことをしてるって実感ないよな、苦勞してないし。

エクスカリバーは、いともあっさり抜けた。そして、抜けたとた
んに再び閃光を放つ。

まぶしさに眩んだ目が見えるようになったとき、そこにはまるで、
僕の手の形に合わせて作ったかのように手に吸い付く柄と、神秘的
で美しい、莊嚴な細工のされた鏢、そして、僕が最も振り回しやす
い長さの、日本刀の刃があった。

「……あれ？」

呆然とする僕に、美しい女性が答えてくれた。

『エクスカリバーは勇者の剣。勇者が最も使いやすい形に、引き抜
かれたときに変形する機能を持っています』

なるほど、それはありがたい。これで僕の習った剣術が使える。

あれ？ この人誰？

答えてくれた女性は、腰まで届く白銀の髪と水色の瞳を持ち、痩せていながらも出るべきところは極めてよく出た理想的なスタイルを、胸と腰を覆うだけの金属鎧で隠している。いわゆるビキニアーマーと言う奴だ。顔にはサークレットをつけ、背中には純白の翼。……翼？

『あなたが今代の主ですね？ 私の名はブリュンヒルド。エクスカリバーに憑きし戦天使です。……そうですね、エクスカリバーをあなたが使いこなすためのナビゲーター、忠実なる下僕しもべ、とお考えください』

「まあ、よくわからないけどよろしくね。でも、自分のことを下僕なんていっちゃ駄目だよ。女の子なんだから」

……なんか、驚いた顔をして真っ赤になった。なんでだろう？
取り合えず、こうして僕はエクスカリバーと出逢ったのだった。

その4 修行開始（後書き）

累計PV2000越え、累計ユニークアクセス450越えしました。まだ初めて5日目、掲載5話目にもかかわらず、ありがとうございます。これからもごひいきにしてください。

●カテゴリー…剣^{ソード}

西洋剣などに代表される、分厚く重い剣。両刃で真っ直ぐなものが多い。

この世界では、兵士や傭兵が使う刀剣類としては最も一般的。切れ味はあまり高くなく、重さで叩き切るようにして使う。極端な話をする、剣が物を切れるのは、「思いつき叩いたら食い込んだ」という状態。

逆に言えば、多少乱暴に扱っても武器として機能するため、時によつては盾としても使える。

●カテゴリー…刀^{ブレイド}

日本刀のように、薄く切れ味の高い剣。叩きつけるのではなく、押し当てて、引くことで生じる摩擦熱で切断する。

攻撃力は極めて高いのだが、うまく当てなければ切れるどころか曲がったり折れたりする。刃がわずかに欠けても切れ味が格段に落ちるため、手入れも大変。

熟練者になれば鉄の鎧ごと切断することも可能といわれるが、そんなことをすれば刃がつぶれてしまうため、普通やらない。

ソードとは違い、ブレイドはわずかな刃こぼれが命取りになるため、武器を盾にすることが出来ない。

本日の設定コーナーは剣と刀の違い。作者なりに調べた結論では

ありますが、実際のリアルは違うかもしれません。ただ、この作品では上記の設定であるとさせていただきます。

その5 お城脱走

時の流れは早いもので、あれから2週間が経った。

毎日エリーの勉強と、グスタフ隊長の特訓を受け続ける毎日だ。

午前中に脳みそが死んで、午後は体が死ぬ。ボスケテ。

取り合えず日常会話は完璧。専門用語とかでてくるとついていけないけど。文化や風習、地理に関しても、ある程度はいけると思う。で、肝心の戦闘訓練だが、取り合えず剣、槍、弓、馬術、いざと言うときの素手での格闘技は何とか形になるようになって来た。とはいっても、正規兵の方々相手ではタイマンで何とかしばらく五分に渡り合えるけど、最後には負けてしまう、と言うレベルだ。それでも正規兵と言うのは、本来なかなか強い。その正規兵相手にここまで戦えるなら、取り合えず冒険者や傭兵になっても戦力としては十分あり、とのお墨付きをいただいた。

無論、一番格下のランクとしては、だが。

「よし！ 次！ 両手剣だ、行くぞ！」

「はい！」

手に持っていた盾を捨て、右手にあった片手半剣バスタードソードを両手で構える。それを正眼に構え、全力で隊長に打ち込む。

まあ、当然捌かれて倒されてしまうのだが。

しばらくして、今日の訓練が終わった。

「よし、今日はここまでだ」

「ありがとうございます」

うん、最近は何とか終わった後も倒れずについていけるようにな

つて来た。……これならいけるかな。

「おう、ケイ。ちょっと付き合え」

「隊長？　なんですか？」

グスタフ隊長に連れて行かれ、廊下を歩く。適当な小道を曲がり、人気のない道に入ってから隊長はつぶやいた。

「おまえ、そろそろ城を出る気だろう？」

「……わかるんですか？」

びっくりだ。ひそかに準備してたのに。まあ、でる前に隊長とエリーには挨拶していくつもりだったけどさ。飛鳥？　あいつにやいらん。役割分担は話し合ってるんだし。

「2、3日前から旅に必要なものとか聞いてたじゃねえか。準備もしてたみたいだしな。まあ、元々長い間この城にいられる身分じゃないから、出て行くのは不思議じゃねえ。だが、なぜ今なんだ？　陛下はまだ放り出すつもりはないようだし、勝手に飛び出す必要はないと思うんだが？」

「そうですね……。ひとつには、この国の内輪もめに巻き込まれる前に出て行きたい、と言うのがあるんです」

3週間も城で暮らしていれば。この国の大まかな派閥は理解できる。

この国は封建制で、王様とそれを支える貴族たちで国を運営しているのだが、封建制の常として国王が絶対権力を持つわけではない。国王は貴族の意向を無視できないし、時には貴族と国王の力バランスが逆転することもある。

で、この境遇を変えて、中央集権システムを作り上げ、絶対王政

にしようとかくらむ王室派。ここの筆頭は国王陛下だが、実は第2王妃が黒幕と言う噂。

次に、そんな横暴な王室に対抗し、貴族中心の議会運営を行おうという貴族派。

単純に持つてる力の総量でいえば貴族派がダントツで一位なのが、何せ一枚岩にはなれない。貴族派の中でも、さらに少なくとも3つの派閥に分裂しているらしい。

3つ目が、王室派、貴族派の間に食い込みながら、虎視眈々と軍事クーデターを起こして軍事政権を握ろうと画策する騎士派。いーのか、騎士がそんなんで。

4つ目が、横暴なる王侯貴族を打ち倒し（そう、基本的に貴族はやりたい放題なのだ）、民中心の国を作ろうとする革命派。

俺が聞いただけでもこれだけの勢力が争っているらしい。

現状の勢力図としては、4つの派閥がそれぞれ一致団結して正面激突するなら最強は貴族派だが、貴族派は内部分裂してるため付け込む隙が多く、結果として王室派、貴族派、騎士派の睨み合い。

革命派は勢力としては弱小だが、地下深くにもぐっているため摘発はできず。

ついでに一般兵や民衆は心情的には革命派。保身があるから表には出さないが、彼らの人数が一番多いのは間違いない。よって、保身を考えずに爆発すると一気にひっくり返る可能性がある。

もうやだ、こんなとこいたくない。

俺自身に各派閥から求められる力はないが、飛鳥を引き込む手段として目をつけられている。マジ勘弁。

余談だが、エリーの立場は血統上王室派になる。ただ、本人は特に政治に関わる気はなく、「皆が仲良く運営してくれればいいのにとかいった。それがいいことか悪いことなのかは判断つかないが、おかげで気兼ねなく話せるのが救いだ。

「なるほどな。まあ、それならわからんでもない」

「それに、最初の謁見時の件で、多分王様に嫌われてますからね、俺」

たまに王様を見かけて目が合うと、「さっさと消えろこのゴミがッ！」みたいな目でみられるんだよな。そのうち王室子飼いの暗殺者とか仕向けられそうで怖い。

「あー。それはあれだ。多分エリシエル殿下と仲がいいからじゃないか？」

「はい？ エリー姫と？ 仲がいいって言えばいいですけど、それは彼女が俺を召喚したからですよ」

「その辺の理由はわからんさ。だが、彼女は末っ子で陛下は溺愛してる。それから見たら、お前さんは“可愛い娘に近づく馬の骨”そのものじゃないか」

げ。マジか。そんなつもりは全然なかったんだけどなー。

「まあなんにせよ、敢えて止める理由もないしな。これは餞別だ、取っとけ」

と、渡されたのは中にお金がぎっしりと詰まった小さな袋。多分だけどこれで一月は暮らせれると思う。

「こ、こんなのもらえませんか！？」

「いいから取っとけ。これまで訓練かねてこっちの仕事も手伝わせてきたんだからな。その報酬だ。どうしても嫌だって言うなら、働いて稼いで返しに来い。そしたら兵士たちも連れてその金で飲みに行こうや」

それがこれからの俺の苦労を慮る彼の好意と優しさであると感じ、不覚にも目頭が熱くなった。

「ありがとうございます。必ず返しに来ますから」



そして深夜。事前に準備しておいた荷物を持ち、そろりそろりと城を出る。

この日のために見張りや巡回警備をかくぐるための調査をしていたのだ。ちょっと危ないタイミングもあつたが、何とか城の裏口から脱出。

ちなみに、エリーへの挨拶はできなかった。公務で忙しかったし、何とか暇になったであろう時間はもう夜遅く。こんな時間に訪ねていたら夜這いと勘違いされかねない。残念だがそんなことするわけにはいかなので仕方がない。

さらば王城。さて町へ繰り出すか、と思つたら。

「あ、待ってましたよ」

なんて笑顔で立ってるお子ちゃまお姫様発見。……Why?

「で、何で、君が、こんな夜遅くに、こんなところにいるのかな？」

「い、いひゃいいひゃい、いひゃいでふよふえい〜！」

ほっぺをむにとつまんで問いただす俺、答えるエリー。ははは、何言ってるかわからんぞ？」

しばし柔らかくて気持ちのいいほっぺを堪能してから話してやる。エリーが「ひろいれす……」などと涙目でつぶやいているが、いや、それ普通に萌えるだけだから。……うん、おかしいな。なんで俺この子に対してこんなSなんだろう？

「で、本当になんでこんなところにいるんだよ？ 夜中だぞ、子供が出歩く時間じゃないぞ」

「私は成人です！ そりゃ見てくれはちっちゃいかもしれませんがけど、もう15なんですから！」

「……ちよつとマテ。この世界っていくつで成人なんだ？」

「え？ 大体15歳ですよ。農村とかは13くらいで結婚する子も多いって聞きますけど。貴族は逆に結婚なんて全部政略結婚ですからね。生まれる前から婚約者が決まっていることもあれば売り時を見計らって言うパターンもあります」

さすが異世界。ぱねえ。つかさそうか。俺ももう大人で結婚ができる年なんだ。

「まあ、故郷と異世界の常識の差はおいておこう。

で、な・ん・で、こんな時間にこんなところにいるんだ？ いくらお城の敷地内とはいえ、真夜中、しかもこんな後2歩で城の外、みたいな場所にお姫様がいるのは物騒にもほどがあるぞ。

どっかの王室派の敵が放った暗殺者とか誘拐魔とか来たらどうするんだ。エリーは可愛いんだから、お姫様とか関係なしに攫いに来る奴も多いと思うぞ」

そして奴隷市に売り飛ばされるのだ。この世界、いまだに奴隷制が残ってるらしい。奴隷のいない常識の中で育った俺にはふざけた

システムそのものだが、そういう世界なのだ、と言われてしまえば、所詮部外者でしかない俺に何かできるわけもない。

辛うじて救いがあるのは、公には奴隷は犯罪者の刑罰の一種として存在するのみである、と言ったところか。ただ、どこにも救いよ
うのない連中と言うのはいるもので、人攫いをしては奴隷に売り飛
ばす下種げすもいるらしい。なのでまあ、注意するに越したことはない。
さてここまで余談っつーか脱線。そろそろお姫様に答えてほしい
ものである。

「え、えつとですね。ケイはもう城を出ちゃうんですよね？」

ばれてるし。ってことは見送りか？

「まあ、そうだけど」

「私も連れて行ってください！　って言うかついて行きますから！」

ばばーん！　……いやいやいやいや！　ないから！　お姫様が
外にあこがれて冒険にでるのは百歩譲ってありえる話だって認めよ
う！

だけど！

パジャマで出かけるとかないから！

パジャマ、と言うと語弊があるかもしれない。彼女が着てるのは
ネグリジエ。しかも結構薄い。透けて全裸が見える、と言うほどで
はないが、ボディラインくらいは透けてわかるレベルだ。

「……お前、自分がどんな格好して言ってるかわかってる？」

「え？　え、あ、ひゃあ！？」

自覚してなかったんかい。仕方がないので城で暮らすようになってからもらった服の中から外套を取り出し、着せてやる。

「で？ 何でまた寝巻きで冒険なんぞを」

「ね、寝巻きは間違いです！ なんでも何もありません！ ケイは私が召喚したんですよ！？ 最後まで責任を持つのは当然じゃないですか！ これでも私は、攻撃魔法を習得していますから、ちゃんとケイのことを守ってあげられますよ？」

……想像してみる。ピンチになる二十歳少し前の熊と呼ばれるような大男。男を殺さんと襲い掛かる化け物。颯爽と現れるぱっと見10歳から高く見ても10代前半の女の子。振るわれる華奢な拳。鉄拳一発、数十mも吹っ飛ぶ化け物。……ないな、うん。

「ははは。なかなか面白い冗談だな、さ、そろそろ夜遅いから部屋に戻りなさい。そうでないとこわいお兄さんが狼になっちゃうぞ」

「？ ケイは獣人ワイルドだったんですか？ それよりも冗談じゃありません！ ちゃんと武装だって用意してきたんですから！ ケイの分もあるんですよ。駄目だって言っても勝手について行っちゃうんですからね！」

お姫様は純情無垢かつ無知だったようです。そして説得失敗。どうすりゃいいんだ、これ。

「……駄目ですか……？」

うゝ。そんな涙目で上目使いで迫られると……

「……お城の生活と比べれば、びっくりするくらいいやなことがた

くさんあるぞ？ ……それでもいいのか？」

こう、最後のダメ押しみたいな台詞を言ってしまう時点で多分俺の負けです。

「はい！ がんばります！」

ですよ。

その5 お城脱走（後書き）

今回は特に設定集で書くことはなさそうなんだよなあ。などと思う作者です。

エリーの寝巻きはどうするかで悩みました。異世界イメージを中世ヨーロッパ“風”と定義してるのですが、時代や地域によりけりですが裸で寝た時代もあるんですよね。ネグリジェ自体は17世紀だったかな？

専門知識はないので、たまにふらりとネットで調べて使う程度で、基本は作者の脳内イメージ優先なんです。

追記..

そういえばこれまで明言してませんでしたが、感想にユーザー登録制限はしてませんので、一見さんでも何かあったらお願いします。

その6 魔装具

「はあ。わかったよ。」

で、武装を持ってきたって言ってたけど？」

渋々負けを認め、気になることを言っていたので聞いてみる。

「あ、はい、こっちです」

ててて、と俺の手を引き走り出すエリー。近くの木陰に連れて行かれ、そこにあったのはいくつかの武装らしい品々。

「じゃーん！　これが私の武器で、魔装具・風神の杖です！」

そういつてエリーが掲げたのは、先端にエメラルドか何かだろうか？　緑色の宝石が嵌められた櫛の杖だった。つか、これ本物の宝石だよな？　俺の拳くらいの大きさなんだが。普通に売ったらすごい金になるんじゃないかねえ？

「この杖には風の精霊が封じられていて、風属性の私があれば簡単なものに限りますが、本来習得してない風の契約魔術が使えるんです」

ほほう。そういえばエリーがどんな魔術が使えるのかもよく知らないな。

「それで、これがケイの分になるんですけど」

そういつて取り出したのは……皮手袋？　色は漆黒で、手首の辺

りが金属の腕輪になっている。ここに小さな赤い石が嵌められているのがちょっと魔法の品（マジックアイテム）っぽい。

「なにこれ？」

「さあ？ 実はよくわかってません」

おい。

てへっ、見たいな顔してんな！ 可愛いから許……すかあ！ 説明しやがれ！

「ええと、これは反転属性専用の魔装具です。探すの苦労したんですよ？ ただ、どんな能力を秘めているのかはわからないんですよ。持ち主がいたと言う記録がないので、起動時の記録もないんです」

「記録がないからわからない、と言うのはまあ、いいとして。魔装具って何？ 後は属性専用とか」

基本的な知識が欠けていた。

「あ、はい。いわゆるマジックアイテムと呼ばれるものにはいくつかの分類があるんです。

マジックアイテムと言う言葉自体が広義としてこれらの品々全てを指すのですが、狭義としてのマジックアイテムが、これから説明する分類のどれにも入らない“その他”の品々になります。

格としては一番低い品ばかりになるんですよね。ちょっと切れ味がいいだけの剣とか。世間で手に入るマジックアイテムの大半がこれになります。

で、魔装具ですが、精霊や英霊、果ては神霊や悪魔の欠片を封じ込め、意思を持たせたものを指します。まあ、意思といっても、会話ができるほどきちんとしたものではなく、漠然としたものなので

すが。

ただ、意思があるからか、通常のマジックアイテムと比べて強大な力を持つてることが多いです。たとえば力は弱くても、使えない魔術が使えるなど、通常のアイテムでは作れないほど複雑な技術を要するような効果が使えたり、ですね」

まてまてまてまて。今さらつとすごい気になることを言わなかったか？

「英霊？ 英霊ってなんだ？ 死んだ兵士の霊？ それともF○t eか、F a○eなのか！？」

オラなんだかワクワクしてきたぞ！

「○a t e ってなんですか？ それはともかく、英霊と言うのは、過去に伝説を残すほどの偉業を達した英雄の霊を指します。彼らが死ぬ前に彼らの協力を得て、その魂の一欠けらを武具に封じ込めるわけです。」

存在としての格は神霊や悪魔はもとより、精霊にもはるかに劣るのですが、人であるがゆえに蓄積された経験や技術を流用できるわけです。ただ、この技能は文字通り魂の一部を奪うことになりますから、英雄と呼ばれるほどの存在でないと耐えられません」

ふむふむ。

「それで話を戻しますが、他の分類には、魔法装置と言うのと神具と言うのがあります。」

魔法装置は名前のとおり、アイテムと言う個人で持ち歩く規格を超えて、塔や部屋などそのものがマジックアイテムであると言う巨大な“装置”です。

システムとしては魔装具と同じなのですが、巨大な分大きな力を持ちます。

最後に神具ですが、やはり高位存在を封じ込めた武具であることに変わりはありません。しかし、その意思是強大で、主との会話も可能とし、時にはその姿さえ顕現できるといいます。

当然、秘められた力は最大で、魔装具レベルでは似た結果すら出せない、とすら言われています。さらに言えば、神具は完全に人格があるため、主と神具の相性が重要になります」

なるほど。そういえば飛鳥のエクスカリバーも神具とか言われてたな。確かに綺麗な天使のお姉さんが現れてた。羨ましくなんてないもんねっ！

「最後に、属性専用の話ですが、魔装具以上の品の中には、特定の属性を持つもののみが使えるものがあります。

これは主を選ぶ分、使える品を見つけるのが大変ですが、その分自分の属性に合わせて効果的な力を行使できるわけですね」

「で、エリーの杖と、この手袋が」

「はい、それぞれ属性専用の品です」

しかしまあ、よくレア属性の反転属性なんて見つけたものだ。

「まあ、ありがたく使わせてもらうよ。で、そっちにある剣は？」

「あ、これもケイのです。ケイが剣の訓練をしてると聞きました」

渡されたのは、質素な、しかし、よく見ると細部にわたって細やかな装飾のされた比較的小ぶりなツインハンドソード両手剣。抜いてみると、その刀身は決して質の悪くないものだと思い知らされる。……うん、こんな訓練で剣振り回してなかったらわからなかったと思うけどな。

「これは我が白竜騎士団の騎士が叙勲される際に渡される正式な剣です。まあ、騎士は盾を使うので儀礼で使われることが一番多いのですが、盾を持たないときに使うことを想定し、実戦でも十分に上に使えるよう作られています。」

さすがに、実際に叙勲に使われた物はその騎士の剣なので、これは予備の物を持ち出してきたんですけど、ケイは私を守る騎士^{ナイト}です……なんてね。冗談です。でも、それくらい信用してますよ？」

ナイト、か。はつきり言うのと、柄じゃない。そういうのは飛鳥の役割で、俺はせいぜい傭兵^{マーセナリイ}だろう。だが、この子を守るための、と言うなら悪くはない。色々世話にもなってるし。

「そっか。騎士なんていうのは過分な扱いだと思うけど、気持ちと剣はありがたくいただくよ」

微笑を浮かべ、剣を受け取る。その後、他の荷物を見渡してみるが、豪華な装飾品らしきものはあれど武装っぽいものはない。

「ところでこっちは？」

「あ、それは私の要らない装飾品です。売れば路銀になると思うので」

なるほど。ならばさっさと行ってしまおう。まさか一国の姫ともあろうものが書置きもなしに旅立つとは思えないが、出る前にばれてしまえば引きとめられるのは目に見えてるし、それは俺も同様。貴族にせよなんにせよ利用し尽くしてやろう、つてのがみえみえだったからなあ。

「なら、さっさといくか。エリーも何時までもそんな格好でいたくないだろうけど、さすがに俺も女の子の着替えなんて持ってないか

らとりあえずはそのままです。

明日適当な服屋で買おう」

「そうですね」



城下町の片隅にある小さな宿に部屋を取り一泊。朝食の前に服を買ってしまおう、と言うことで服屋で買い物をし、その足で武器屋に向かう。

武器はあるのだが、予備の武器も持て、とグスタフ隊長に言われたので、物色開始。それに防具は必須だ。取り合えず武器はブロードソードを選んだ。質は……騎士の剣ほどの名剣ならばともかく、一般の剣の目利きができるほどの訓練は受けてない。安物ではないことを祈るのみだ。

防具はさてどうするか。エリーは第二王女で肖像画とかにもなったことがあるから、顔がばれて騒ぎになる可能性がある。そうでなくとも、エリーは器量よしなので揉め事の種になる。なので、顔ごと隠せるフード付きの黒いローブにした。

俺は、ローブではなく鎧だ。ただ、金属鎧は高い。その上板金鎧などになればもう特注するしかない。当然、時間がかかる。しかし、皮鎧は防御力に不安があるし、そこそこ硬い硬革鎧ハードレザーアーマーはやはり成型が必要だ。と、言うわけで、俺は急所のみを守るポイントアーマーを買うことにした。金と時間ができたらもっといい鎧買ってやる。

最後に盾。これは悩んだ。盾には大まかに分けて、グリップを手で持つだけのタイプとベルトで腕に固定するタイプがある。後者のほうが防御力は高いのだが、前者のほうが武器の持ち替えが楽なの

だ。これは30分くらいその場で頭抱えて悩んだ挙句、グリップ型の円形盾にした。
ラウンドシールド

と、そういえば。

「ものすごい今更だけど、この手袋ってどうやって使うの？」

魔装具だという手袋の存在を忘れていた。一度も身につけちゃいねえ。

「基本的に、魔装具は装備すれば魔装具のほうから語りかけてくれるはずですよ」

「なるほど。では早速装備してみるか」

すちゃ、っと装備。ただの手袋だし、気負うものは何もない。そして、装備した途端、

『ふむ。おぬしが今代の主か。あゐじよろしく頼むぞ』

そんなことを言う、妖精さんが現れたのだった。

その6 魔装具（後書き）

……ふっ……気がつくと言明だけで話のほぼ全てを使った気がするんだぜ……

そしてようやく主人公補正的なアイテム登場。ただし説明は次回、実用化はまだまだ先になると思います。

作中に登場した白竜騎士団は、エルメンライヒ王国の花形騎士団です。戦争における主力は全軍最大数を誇る鉄の槍騎士団なのですが、白竜騎士団は少数精鋭で、少なくとも個人の武勇、という点ではエルメンライヒ王国最強といわれています。

このため、彼らは主に大人数を動員できない近衛騎士として普段を過ごし、戦時には少数の投入で戦局が決まる、という局面に投入する切り札として扱われています。

グスタフ隊長をすごい強い人という描写をしておりますが、実際問題として、白竜騎士団最強の騎士とタイマンしたらどっちが勝つか、は作者も「運次第」と設定しています。これは、一回の兵士と互角の白竜騎士団微妙、ではなく、国一番の騎士と互角に戦えるグスタフがすごい例外的存在なのだ、と受け取っていただければ幸いです。

その7 創造幻想

妖精さん。

その大きさは、全長10センチ程度だろうか？ 肩甲骨辺りまで伸びた金の髪と、血のような、あるいは紅玉ルビーのような赤い瞳。背があれなのでよくわからないが、胸は大きいように思える。そんな美少女だった。

……3頭身デフォルメだけどな！

「で、アンタ、何？」

『何とは失礼じゃな。我はこの神具・創造幻想リアル・イマジに眠りし英霊じゃよ』

英霊。昨日聞いた、伝説の英雄の魂の欠片。……この3頭身デフォルメが？

神具。やはり昨日聞いた、魔装具を凌ぐ伝説の武具。……この手袋が？

『ぱつと見てわからんのも無理ないが、事実じゃよ。ちなみに3頭身デフォルメなのは、主の魔力が生前の姿を作るに足りないからじゃ。本来の我は主の好み通りのナイスバディじゃぞ。精進するがよい』

なんだと！？ ならがんばって強くなれば俺好みのナイスバディのお姉さんとご主人様特権であんなことやこんなことが！？

『……いやまあ、年頃の男じゃし、当然の思考といえ思考なんじやが、こっちにまでその妄想が駄々漏れじゃぞい』

さすがに引くわ、とまで言われ、ちよつとショック。いや俺が悪

いんだけどさ。そしてエリー。なぜこっちをそんな目で見てるんだ。
「やっぱり……胸……」とだけ聞こえるけど、そんなに引かれるようなことを考えてましたか俺は！？

「ごほん。で、お前は本当になんなんだ？ いや、この手袋に取りついた妖精さんだと言うことは理解したけど。名前とか、手袋の力とか。あ、俺は山岸啓太」

『主の名前は精神がリンクしておるから理解している。我の名だが、あいにく生前はともあれ今はしがない道具ゆえな。個人名と言うものはない。創造幻想と呼ぶか、それがいやなら適当にあだ名でもつけてくれ』

「ふむ。……じゃありアで」

名前をつけると、妖精——リアはふむ、と頷いた後。

『響きは悪くないの。由来はなんじゃ？』

「由来といわれてもな。“リアル”でリア」

『……はあ』

溜息を吐かれた。なんかすげえショックだ。

『さて、我の、と言うか、創造幻想の能力じゃったな。

一言で言うなら、これは主がイメージした物質を現実形作る能力がある』

よっしゃ投○魔術来た——————————！ 宝
○か！ ○具を○影すればいいんだな！ エクス○リバーでどんな敵も一撃必殺だ——————————————————————！

『……いや、主よ。それは無理じゃから』

「え？　なんでだよ？」

そういう能力なんだろう？

『……やってみればわかるか。とりあえず、今考えた剣を作ってみればよからう。脳内で綿密にイメージをし、手袋に「作れ」と命令を出すだけじゃ。言葉すら要らぬよ』

ふむ。呼吸を落ち着け、軽く目を瞑る。

想像せよ！　黄金の刃、質素だが美しい装飾、迸る魔力。その剣は十二の会戦を超えなお不屈。その勲詩は千の年を越えなお不朽。折れることなく存在し、鎧を着た敵ですら一刀両断にしたその切れ味。ゆえに、その銘は――

「こい！　エクス――！」

俺の叫びに応え、大気が、魔力が、俺の中に集まり――――霧散した。

「……………あれ？」

手の中には何もない。なんか力が集まったんだけど……

『まあ、当然じゃろうな』

「なんでだよ。想像したものを作るんじゃないのか？」

『無論そうじゃ。だが、無条件で何でも作れるわけではない。そこにはちゃんとした法^{ルール}がある』

法？

『まず、作るものの重さ、そして、マジックアイテムであるなら、その力。その双方に応じて、作るのに必要な魔力が変わる。重ければ重いほど、強大な魔力を持っていればいるほど、魔力が必要になるわけじゃ』

ふむふむ。まあ、確かにそれはそうだろう。

『次に、矛盾するものは作れん』

矛盾するもの。

それはつまり、魔力がこもっていないのに、「どんなものでも切れ、どんなことがあっても折れない剣」のようなものか。

剣は切れ味を求めれば求めるほど、折れやすくなるという性質を持つ。残念ながら、両立は無理なのだ。

『そして最後に。その品を理解してなければいかんのじゃ。魔剣などであるなら、こめられた魔術式もな』

あ、そりゃあ失敗するわけだ。あの剣にどんな魔術式があるのか、なんて知ってるわけねえ。だってフィクションのアイテムだしなあ。

『今の主の想像力では、背負ってる剣すら作れんじやろう。切れ味と構造に矛盾を出して破綻させるのは目に見え取るわ』

うわ、使えねえ。

つまり、リアの発言をまとめると、こうだ。「強い武器を作れるようになりたいなら、材質から構造から、果ては魔剣なら魔術式に至るまで。その武器を構成する要素全てを理解しろ」

……実用化にどれだけ時間がかかるんだ、これ。

『まあ、練習も兼ねて、主が思いつく一番身近なものを作ってみるとよからうて。』

そうじゃな、日用品とかがいいぞ』

よく使う日用品、か。……箸？　とりあえず、学食にあった割り箸をイメージする。着色もされてない、普通に割り箸。イメージは簡単だ。……よし、行け！

30秒ほど集中してイメージして、割り箸を作る。

「……本当に、できた」

手の中には、れっきとした割り箸があった。

「ケイ、これは何ですか？」

興味を持ったのだろう、エリーが手の中を覗き込んで聞いてきた。

「これは割り箸といって、俺の故郷にあった食器だ。こうやって割って、こういう風にもって食べ物を掴むんだ」

割り箸を割って実演してみる。

「面白いですね」

私もやってみたいです、なんていうエリーの願いに応え、もう1回。……よし、成功！

ところで。

「なあ、リア。これの何が“反転属性”なんだ？」
『ああ、そこか。それは、反転の力で現実を反転させ、主の想像を
現実にしておるのじゃよ』

よくわからないけどそんなものなのか。
取り合えず、いつかこれで物語みたいなすごい剣を作ってみたい
ものだ。



取り合えず、リアを肩に乗せた俺は、エリーの手を引いて冒険者
の店にやってきた。

冒険者、と言うのは、いわゆる何でも屋だ。何でも屋と違うのは、
傭兵のように戦闘を想定していること。傭兵と違うのは、何でも屋
のように戦闘以外のことも行うこと。

冒険者は、時に物語の英雄としての立場を得るが、事実にはなは
だ散文的で、ゴロツキよりはマシな正規の職業につけない人々、と
言うイメージを人々は持っている。まあ、それでも仕事があるのだ
から、そんな連中の力でも借りたい世界、と言うことなのだろう。

ちなみに、冒険者は登録とか特権的^{ギルド}同業組合とかはまったくない。
名乗ればそれで冒険者なのだ。

「と、言うわけではじめまして。新米冒険者のケイとエリーです」
「どういうわけかはよくわからないが、よろしくな。新米かい、お
前さんたち」

挨拶をした冒険者の店の親父さんは好々爺みたいな表情でそんなことを言った。ちなみに冒険者の店と言うのは、その名のとおり冒険者に来る依頼を仲介するお店で、酒場も兼用している。

依頼人は、普段は冒険者なんて関わりたくない人々。個々の冒険者なんて知らなくても、冒険者の店の看板を見て来れば、依頼はできると言うわけだ。

「まあ、うちは初心者歓迎だからね。ゆっくりとしていってくれ」「いえ……ゆっくりしたいのは山々なのですが、できるだけ早く仕事を始めたいんです。初心者でもできて、別の町や国に向かう仕事はありませんか？」

残念ながら、俺たちは城から抜け出してきた客人とお姫様なのだ。城下町とはいえ、長居すると追っ手に捕まる可能性は高くなる。

「ふむ。急だね。訳ありかな？　おうい、リチャード」

親父さんの呼び声に応えて、酒場のテーブルでポーカーらしきゲームをやっていた男性がこっちへとやってきた。

「なんだい、親父さん」

「お前さんたちのパーティ、確か午後から隊商の護衛でラムラドルまで行くんだろ？　このひよっこどもも連れて行ってくれないか」「いつものかい？　まあ、かまわないけど」

30半ばくらいの男性は、そこでこっちを向いて挨拶をしてきた。

「はじめまして。私はリチャード・エレン・ライアンだ。この店の専属冒険者でね。君たちのような新人と一緒に仕事をして、仕事の基本や感覚を勉強する、と言うことをよくやっている。」

君たちがよければ、今回私たちの仕事を、共に請けることになるけどどうだろうか？」

「はじめまして。ケイです。こっちはエリー。」

今のお話ですと、渡りに船と言うか、デメリットがこちらにはまったくないおいしい話のように聞こえますが、何か“受けない”ことを選ぶ可能性のある問題はあるのでしょうか？」

俺の返事に、リチャードはほう、と感嘆の声を上げた。

「よく目をつけたね。確かに私は、君たちに有利なことしか言わなかった。そこで食いついてこなかったのは正解だ。見込みがあるね。ちなみに言わなかった問題点だけど、まず一つは、基本的に私たちの指示に従ってもらうことになる。もちろん、無茶なことを言うつもりはないよ。この新人教育も親父さんからの依頼として扱われるからね。無茶なことを言って死なれたらこっちも報酬を貰い損ねるわけだ。」

でも、嫌な思いをするような内容になる可能性はあるからね」

素人でもできる、でも汚れる仕事とか、疲れる仕事とかを任せられるのだろうか。あるいはミスをしたときに怒鳴られるのかもしれない。

まあ、そんなこといってたらバイトすらできないしな。新人なら当然のことだ。

「次に、研修期間、と言うことで、報酬の分配のとき、君たちの分は少し少なくなる。そうだな。みんなで頭割りをしたときの、2割くらいが減ると思ってくれ」

「なるほど。それだけでしょうか？　そうでしたら、よろしく願います」

この条件。確かに全部が全部いいことではない。だが、リチャードさんたちが正統、かつ善人な冒険者であるならば、この条件は金銭よりも大事なものの、つまり経験とか、冒険者の常識とか、そういうものを手に入れられるはずだ。

それに、午後にも街を出るとなると、これはとてもありがたい。

こうして、俺たちの初めての冒険は幕を開けた。



Side..飛鳥

朝、と言うか、すでに昼なのだが、起きたら、ジャスティン姫とジャスティが部屋に飛び込んできた。

「飛鳥様！ 一大事です！ 飛鳥様の御友人が城の財宝と妹のエリ―を盗んで城を抜け出しました！」

「……………はい？」

ジャスティの話をまとめると、起床の時間になってもエリシエル姫が起きてこなかったらしい。

これは珍しいことなのだが、疲れていたのだろう、と少し放置したものの一向に起きてくる気配がない。さすがにこれ以上はまずい、と言うところで女官がお越しに部屋へ入ったところ、ベッドはものの抜け殻。

寝巻きがなく、服は揃っていたことから、寝巻きのままいなくなった、と判断したのだそう。

確かに、寝巻き出歩いて城を出るわけないから、誘拐された可能性、と言うのは妥当な線だろう。さらに調べを進めてみたところ、エリシエル姫の装飾品がいくつかと、宝物庫においてあった魔装具が2つなくなっていたらしい。

姫の誘拐、さらに宝物の窃盗。断じて見過ごすわけには行かない、犯人を見つけなければ、と意気込む兵士たちは、ふと気づいた。啓太がいない。

もし、これで啓太もさらわれた様子があったのなら、別の判断がされたのだろうが、啓太の部屋は、どう見ても事前に準備をして自らの意思で城を出たようにしか見えなかったらしい。

で、国王陛下を筆頭に、「啓太がエリシエル姫に懸想を抱いた挙句、身分の差を慮って誘拐。行きがけの駄賃に金品を奪ったのだ」と言う理屈で纏められ、現在指名手配の準備をしているらしい。

「飛鳥様はどう思われますか？」

「エリシエル姫がなぜいなくなったのか。宝を盗んだのは誰か。それはわからない。啓太が自分の足で城を出たのも正しいと思う。けど、犯人は啓太じゃない」

それだけは断言できる。

「なぜ？ 自慢ではありませんが、エリーは器量よしです。年頃の殿方が惚れてしまい思いつめてもおかしくはありません」

「うん、一度拝見したことあるけど、可愛い子だったね。でも、その理由で啓太が彼女をさらうことはないんだ。だって……」

うん、この理由でだけはない。何年幼馴染やってきたと思ってるのか。

「あいつ、スタイルのいい年上の女性が好きだからね。女性に惚れて浚うなら、エリシエル姫じゃなくてジャスティのほうだと思うよ」「え？　そ、そうなのですか？」

「うん。ジャスティはすごい美人だし、多分啓太の好みどんぴしゃだと思うな。だから、啓太じゃないよ」

あ。ジャスティがすごい真っ赤になった。やっぱり付き合いのいい人間でも、自分がその男性の好みそのものって言われるのは意識するもののかな。

「わ、わかりました。飛鳥様のことですから、信じます。ですが、父上や兵士たちまで説得できるとは……」

そこが難点だ。状況証拠としては啓太に不利すぎる。

「困ったな。どうにかならないかな？」

「……わかりました。父上を説得します。手配まで解除できるとは思えませんが、せめて捕まえるときに五体満足で捕まえる、位の妥協は引き出して見せます」

そんなわけで。

山岸啓太の指名手配が始まったのだった。……啓太、ごめん。僕は無力だ。

その7 創造幻想（後書き）

気がついたらPV6500オーバー！ ユニークアクセス1000オーバー！ さらにお気に入り数が20を超えました！ 皆様ありがとうございます！

創造幻想は、術者に知識があればあるほど力を増す神具ですが、現在の啓太では日用品（割り箸）を作り出すのがせいぜい。それも30秒の集中が必要なので、実戦ではまったく使えません。

もっとレベルが上がったら戦闘にも使わせたいのですが……魔剣はないな、多分（笑）

そして初の感想をいただきました！ アルフォンス様、ありがとうございます。悪い点の御指摘ありがとうございます。

すでに投稿した話を書き直す、と言う意思是現在のところありませんが、これからの話を書くときに留意点とさせていただきます。

その8 初めての戦闘

そして午後。リチャードさんに連れられて、護衛する隊商の所へと向かった。

「始めまして。冒険者のケイです。こちらはエリー」

「はじめまして。ラングフォード商会会長のジャレッド・レテーナ・アーサー・ラングフォードです。」

まあ、商会会長、なんていっても、見てのとおり馬車3台と従業員5人が全ての弱小商会だけだね」

「ぬおおおおお！ リチャード！ あのちっこいフード、女か！ 女だよな！？ だって名前エリーなものな！？」

「美人ですか！？ 美人ですよねリーダー！？ 美人じゃなかったら僕リーダーに最上級攻撃魔法撃ちますよ！？」

「はあ……このむさくるしい冒険者家業をはじめて早10年……ようやく癒しに出会えそうです」

「……君たち、騒ぎすぎ」

……後半の台詞はリチャードさんのパーティのメンバーで、台詞の順に盗賊のステイヴ、魔術師のホレス、神官戦士のデニスと言う。全員二十代後半から三十代前半と言うところで、戦士であるリチャードさんをリーダーとする4人のパーティだ。

ここではじめて知ったのだが、女冒険者、と言うのは街で一人いるかどうか、と言うほど希少な存在らしい。

まあ、種の繁栄と言う点から考えれば、長期間おなかの中で子供を育まないといけない女性は戦場に出るには向いているとは言いがたい、と言うことなのだろう。体力勝負でもあるしな。

もちろん、だからといって女性が戦いの場に赴くことを禁じる法はない。ないのだが、まあ、珍しい存在だ、と言うことだ。

……まあ、ぶっちゃけどうでもいいです。後エリーにナンパするな！

「「「うわこの新人ひでえ!?!」」」

ひどくないから。保護者（自称。仕方ないじゃないか。このちびっ子は世間知らずのお姫様なんだから）として下手な馬の骨に穢させるわけにはいかないのです。



そんなこんなで王都を出た。

どうやら、街の出入り口には関所があり、通行税が取られるらしい。一応身元証明みたいなものもあるのだが、元来一等市民でもない戸籍なんてない世界である。帳簿に名前（偽名だって可能）を書いて、指名手配されてる顔でなければオールオッケー、って感じだ。

エリーの顔も見られたが、担当の人はエリーの顔を知らなかったらしい。よかった。

……後日、王城から来た指名手配が、俺らの出立の1時間後に来たとなり、己が幸運をかみ締めるのであった。

で、冒険に出て早3日。今のところはこれといって何もなく安全

な旅である。

まあ、エリーが体力尽きて倒れたり地味に一番体力のあった俺が背負ったりして疲れたけど。ただ、リチャードさんから

「冒険者は体力が資本。今回は初めてだから大目に見るけど、この冒険が終わった後この程度で倒れる体力はどうにかしないと冒険者はやっていけないよ」

といわれ、エリーは凹んだ。まあ、こればかりは仕方がない。がんばれ。ジョギングするんだ。おにーさんも付き合っただけであげるから。

まあ、そんなわけで、今まではこれといって何事もなく、安全な旅“だった”。

いきなり過去形になった理由。それは――

「ゴ布林だ！　ゴ布林が出たぞ！　数は……ちっ、20、それも三方から囲まれてるぞ！」

「応戦しろ！　馬車には1匹たりとも触れさせるなよ！」

と、いうわけだった。

結論から言おう。さすがベテラン冒険者。とても強かった。

リチャードさん、スティーヴさん、デニスさん。この三人は、それぞれが前衛としての訓練を積んでいる。このため、三方からの襲撃をそれぞれ単身で食い止めているのだ。

リチャードさんの武器は長槍。2mはあるであろうそれを軽快に振り回し、1匹、1匹と、確実にその心臓を貫いていく。その正確さは機械の如し。

スティーヴさんは短剣の二刀流。迫り来るゴブリンの攻撃を受け

止めずに軽快な足裁きで回避し、カウンターで頸動脈を切り裂いていく。

デニスさんは盾とメイスを構え、ゴブリンの攻撃を受け止め、反撃でメイスを振り回す。このメイスが淡く輝いているのは、神官が使える神聖魔術の力だそう。そして、その合間に魔術を唱えリチャードさんやスティヴの支援をする。

ホレスさんは火属性の魔術師らしく、火球を作り出し放つ。これが敵に触れると爆発するのだ。まさに爆裂^{ファイアーボール}火球。

こんな四人が絶妙なコンビネーションで戦ってるので、こっちに關してはまったく問題がない。問題なのはもちろん俺たちだった。

俺は一応デニスさんのそばで取りこぼしのゴ布林と戦っている。デニスさんは神官戦士なので、戦士としての訓練は他の二人に比べれると錬度が低い。さらに支援魔術をするのにどうしても隙ができる。これを補っているわけだ。ちなみに、エリーはホレスさんの隣でおびえている。まあ、喧嘩すらししたことないだろうし、仕方がないのだが。

だが。

振り下ろされたゴブリンの錆びた剣を騎士剣で受け止める。そして反撃とばかりに騎士剣を横薙ぎにするが、これはバックステップでかわされる。

……地味に、ゴ布林が強いのだ。

もちろん、1対1で戦う限り、いつかは勝てる。それはわかる。だが、一撃必殺とかはいえない。

それでも、ついに耐え切れなくなったのか、俺の剣がゴブリンの頭に、

ゴシヤ。

嫌な、音と、感触が、した。

一撃で倒れ動かなくなるゴブリン。手には、たった今奪った命の感触が。

眩暈がした。吐き気もする。

当たり前だ。ちょっと前まで普通の平和な世界を生きる高校生だったのだ。自分の手で殺したことがある生き物なんてそれこそ虫くらい。

それが、何をしているのか。ゴブリン？ 魔物？ だが、命だ。尊いひとつの命に変わりはない。

だが、殺さなければ殺されていた。だから殺してもいい？ 正当防衛は、罪ではないと？ 罪ならばただ殺されろと言うのだろうか？ わからない。頭の中で奪った命の感触がグルグルグルぐるぐる……

「ケイ、危ない！」

エリーの声が聞こえた。途端、飛んでくる謎のビーム。直撃するゴブリン。……あれ？

気がつけば、吐き気は消えていた。落ち着けば状況は理解できる。初めて命を奪ったことに混乱し、錯乱した俺を殺そうと近づいてきたゴブリン。

これを倒すためにエリーが攻撃魔法を放ったのだろう。……でもさあ。

幅3mはあろう直線状のクレーターができるビームって何よ？ この世界の魔法ってすごいなあ。

「……いや、彼女の魔法は明らかに規格外だと思いますよ。僕もあんな精霊魔術は聞いたことないですし。黒魔術か何かなのかな？」

なんかホレスさんまでなんか言ってた。ナニモンだ、エリー。



戦闘は終わった。ゴブリンは殲滅し、一部は逃げ出した。結局、俺の戦果はゴブリン1匹だけだ。

……まだその手に残った感触は思い出せる。あの生々しさ。例えば、生きるためであったとしても、それは罪であったと教えてくれる。

多分、この世界にいる限り、俺は、また命を奪うのだろう。考えてみれば、人は誰だって生きるために、何も知らないどこかの命を奪っている。食料だったりもするし、自分が成功した陰で失われた命があったかもしれない。だから、当然のことなのだ。だから、俺はこの先敵を殺すことに躊躇をしない。

でも。

この日のことを覚えておこう。例えばそれが偽善だとしても。この先奪う全ての命のことを、忘れないようにしよう。

そう、目の前の惨状に、誓った。

その8 初めての戦闘（後書き）

お久し振りです。戦闘描写とか苦手です。

PV1万オーバーとかユニークアクセス1500オーバーとか、
ありがとうございます！ またのんびりとがんばります。

カテゴリ…スピア槍

長い棒に尖った刃物をつけた極めて古くからある武器。

剣などと比べると、振り回しての遠心力を利用した攻撃は少なく、
威力に乏しいが、急所に刺されば十分な殺傷力を発揮する。

さらに間合いが長いので、敵の攻撃が届く前にしとめることが容易。
特に長槍と呼ばれる武器にいたっては、両手剣の間合いでも届かない。

欠点としては、急所を持たないゴーレムなどの魔物や金属鎧などの
固い守り直接貫かないといけない相手には効果が薄い。所詮は点
に対する攻撃だから。

その9 指名手配

ラムラドール。エルメンライヒ王国でも比較的外側にある都市。もちろん、この街を出たらすぐ国境、と言うわけではないが、これより先に村や小さな町はあれど都市はない。そういう位置にある都市だ。

そのラムラドールに到着したのが、たった今。旅を続けておおよそ一週間と言ったところか。あのゴブリンの襲撃以来、何事もなく終わったのは、まさに幸いだった。リチャードさんも、あれだけ平穩な旅は珍しい、とのこと。

……町から町へ旅するだけで魔物に襲撃するのがデフォルトか。どんだけ危険なんだ異世界。

「お疲れ様。それじゃあ、これ。今回の報酬。君たちの取り分だ」

リチャードさんから、お金を受け取り別れる。内訳は大銀貨2枚、銀貨2枚、大銅貨2枚。

……折角なので、ここでちょっと貨幣の話をしておこう。ちょっと長いので面倒なら読み飛ばしてくれ。

貨幣の最低単位は銅貨。日本円の換算をしようとおもったけど、あきらめた。物価のバランスが全然違う。生活必需品は安くて嗜好品は驚くほど高い。

この銅貨10枚で、大銅貨と言う貨幣に換金できる。本当に大きい銅貨だ。手で持ってみたところ、本当に銅貨10枚分くらいの重さ。

さらに銅貨が5枚になると、銀貨になる。銀貨の大きさは違うが、重さは銅貨と同じくらい。つまり、銅と銀は50対1で交換される

と言うこと。銀貨10枚で、大銀貨になる。

大銀貨2枚で金貨1枚になる。たった2枚で、と思われるが、そもそも金貨になるとほとんど流通しないわけだ。まあ、大銀貨1枚で銅貨500枚分だしな。で、この金貨10枚で大金貨となる。

実は、この上となる硬貨がある。その名もオリハルコン貨。

俺の世界ではゲームくらいでしか聞かない名だが、この世界には実在するらしい。もちろん伝説の金属だ。

このオリハルコン貨。なんと大金貨20枚分の価値がある。銅貨に換算すると、なんと20万枚。もうビロードを敷き詰めたケースに入れて恭しく持ち運ぶレベルだ。

ちなみにこのオリハルコン貨。エリーも見たことないそうなの。

で、今回の報酬は2人で銅貨にして1120枚。大体月の生活費が宿屋暮らしで銅貨600枚ほどらしい。つまり、俺とエリーで1月暮らせない程度、と言うことだ。

これは余談だが、農民たちの月の生活費は銅貨60枚。家があるから宿代がかからないし、食費も自作だからほとんど浮く。足りない材料をちよつと買う程度、らしい。いやすごい差だ。

で。

宿を取ろうと大通りに入ったとき、それに気づいた。

お尋ね者の張り紙だ。いわゆる冒険者や賞金稼ぎに向けて張られるものだが、情報だけでも褒賞の対象になりうるので、一般市民もたまに目をやる。

が、俺がそれに気づいたのは別に褒賞がほしかったわけではない。

手配書の一番上に、でかでかと俺の名前がかいてあったからだ。

身長187センチ、黒髪黒目。特徴としても間違いなく俺だ。幸

運にも、似顔絵はあんまり似ていない。おそらくは城のお付き似顔絵描きとかではなく、そちらから来た情報を基に、この町の人間が描いたのだろう。あまり似てはいないが、いくつかの特徴は、確かに捉えている。

罪状は、「誘拐事件最有力容疑者」。ただし生きて捉えること、となっているのが不思議だ。普通こういうのってデッド・オア・アライブじゃね？

「……って言うか、俺が一体誰を誘拐したんだっての……」
「……あ、わ、私のことかもしれません」

独り言を聞き、申し訳なさそうにつぶやくエリー。マテコラ。

「なぜ？」
「そ、その……。怒らないでくださいね？ 私、城に置手紙かいてくるの、忘れちゃいました」

はっはっは。なあゝるほど。そりゃあお姫様が手紙の一つもなく失踪したら誘拐くらい疑うよなあ。同じタイミングでいなくなった男なんて妖しい怪しい。……って。

「ふつつつつざけんあああああああああああああああ！
！！！！！！！！」

おま！ そのせいでこれからどーしてくれるんだこら！ 俺完全にお尋ね者じゃねえか！」

「ごごごごごごごごごごめんなさーい！」

「いいや、許さん！ 今回ばかりはおしおきじゃあああ！」

……はっ。周りが騒ぎを聞いてこっち見てる。
ヤバイ。このままじゃあ俺とこの張り紙のことがバレル。

「つと、ここはまずい。一度逃げるぞ」
「え？ き、きゃあ！？」

エリーの手を掴み、走り出す俺。

……どうすんだ、これ。



結局、取った宿は大通りに面した立派な宿ではなく、裏路地にある寂れた宿となった。

ここはほとんどスラムの入り口で、いわゆる「スネに傷のある方々」が利用する宿だ。店主は店に害のある行動を取らない限り、彼らの素性については触れないし、誰にも言わない。

だが、お役人が確証を持ってくれば逆らわないし、宿代も高い。完全にボッタクリだ。普通の宿が素泊まりで1泊銅貨15枚程度のところ50枚取る。そして部屋はお世辞にも上等とはいえない。馬小屋よりはマシ、と言う程度だ。

俺らが持っているお金は、銅貨で換算すれば5000枚を超える。いや、エリーの装飾品売っぱらったからなんだが。だが、食事も全うな店するのは難しい以上、どう考えても裏商売用のボッタクリ店になる。

さすがに困る。それだと一月くらいしか生活できない。
もちろん稼げばいいのだが、何時入り用になるかわからないし、

ここに永住するわけではない。旅費だって必要だ。

と、言うわけで、部屋を一つだけとって相部屋で節約することにした。無論二人部屋だと二人分取られるので一人部屋。ベッドも一つしかない。

エリーはお姫様だし、男と相部屋なんて嫌だろうと思ったのだが、不思議なことに言い出したのはエリーだった。

「なあ、本当によかったのか？ 俺^{おれ}なんとか相部屋で。普通嫌がるもんだろう」

「それはまあ。でも仕方ないじゃないですか。お金たくさん持つてるわけじゃないんですし。それに、ケイだから相部屋でも言い、っ
て思っただんです」

「……へ？」

……あの、それって一体どういう……？

「ケイって、死んだ兄様みたいなんですよね。それに優しいですし。安心です」

……そうですか。まあ、いいけど。



取りあえず、エリーとは二手に分かれ、町に向かった。

エリーは表街道に行き、衛兵の様子や地図の購入などをしに。間

違ってもフードは取らないよう、声もできるだけ小声にするように言い含めておいた。

一方俺は、スラムへ向かう。いわゆる“裏の情報”を求めてだ。兵士に捕まらずに国外へ出るにはどうすればいいか。裏社会の情報なら、そういうものも手に入るはずだ。

何せ指名手配だものなあ。まあ、そうでなくても、王城に召喚術の返還に関する情報がなかった時点でこの国にはそれがないと見ていい。この国は魔術に関しては遅れてるらしく、魔術師ギルドもないしな。なので、外国の魔術師ギルドとか高名な賢者を訪ね歩くしかないのだ。

ついでに、変装に使えるようなものがあったら欲しいところだ。髪の色を買える染め粉とか。

「この国の外へ、かい。そうだな。簡単な方法はさすがにないが、主街道をまっすぐ進むのはやめておきな。関所で捕まえてくれと言うようなものだ」

数刻後、ようやく見つけた情報屋で俺は話を聞いていた。

「関所は裏街道か、いつそ山や森を抜けたほうが確実だろうな。ア
ンタだろ？ 誘拐犯として莫大な賞金欠けられてるのは」

「げ」

ばれてくら。

「ああ、安心しろ。俺からわざわざお役人に密告^{チク}ったりはしねえよ。まあ、賞金稼ぎたちがうちに聞きに來たら、その保証はないがね」

ああ、なんか本で読んだことあったな。こんなこと。

「その情報、“買占め”たいんだが、いくらだ？」

「はっ、わかってるじゃねえか、兄ちゃん。……そうだな。大銀貨2枚。格安だろ？」

めちやくちやいてえ！　だが、背に腹は変えられないので、素直に払う。

「いやー、払いのいい相手に助かるわ。よし、これであんたの話は“品切れ”だ。」

んで、話の続きだが、あんたらを追って3つの国境付近にそれぞれ兵が駐屯してる。下手に裏街道行くよりは森の中を突っ切るのがいいかもな。

尤も、森は魔物の巣窟だ。それを潜り抜けられるのなら、けどね。無理ならあきらめな、他に手はねえ」

「……すまない、助かった」

むすつとしながら背を向ける。聞くべきことは聞いた。

「ああ、そうだ。折角の上客だ。一つサービスしてやるよ。変装するなら、ここを出て右手4件目の店で染め粉を買いな。あそこの染め粉は質がいいぜ」



「うあー。しかしぼったくられたなー。まったく、情報が必要だか

らってあれは足元見すぎだろう」

『まったくじゃな。しかしまあ、ある程度の目処が立ったのだからよかったのではないか？ 後はどこの国に向かうか、位じゃろ？』

「まあな。俺はその辺の地理は不案内だし。エリーが買ってくる地図に期待、だな」

裏路地を歩きながら、リアと会話する。しかし、俺は2人だが、エリーは一人。正直不安だ。

『まったく。それだから、あの娘も主を信頼あるじするのだろうか。同じ部屋でもいいと思うくらいに』

「そんなもんかね……っと」

とすん、と軽い音がして、子供が一人ぶつかってきた。

13、4歳だろうか？ なかなか可愛らしい顔をした、多分男。赤毛の髪もショートだし、ぱっと見平らだし。

「あ、ご、ごめんなさい」

急いでたのだろう。少年はそのまま謝罪を一言して去っていった。しまった。まあ、謝ったしいいか。

それにしても。

「……しかし、さすが異世界。エルフっているんだな」

そう、ぶつかってきた少年は、横に長く伸びる……そう、ロバのような、と言うべきか、そんな耳を持っていた。

『ああ、主の故郷にはエルフはおらなんだか。じゃが、赤毛と言うことは、おそらくはハーフじゃな。純粋なエルフなら金か銀の髪を

持つ』

「なるほどなあ」

『ハーフエルフは、被差別種族じゃ。主の主観でどう思うかはさておき、世間ではそうなのだ、と言うことは認識しておいたほうがよからう』

「ん。サンキュ。んじゃあ、お礼にどっかの店で甘味でも食うか？」

『ひゃっほう♪ あの娘には内緒じゃな』

「だな。えーと、いくら残ってたっけな……あれ？」

懐に入れておいた財布がない。これは……あれだ。多分、間違いない。物語でよくあるパターンだ。

つまり、俺はさっきのハーフエルフの少年に、財布をすられたらしい。

その9 指名手配(後書き)

ユニークアクセス2000オーバー！ ありがとうございます！
以下、いつもの。

●種族…ハーフエルフ

エルフと人間の間に生まれる名前どおりの種族。平均寿命はおおよそ2000年。記録上は400年生きた個体もいるという。

人間でもなく、エルフでもない。そんな存在であるがゆえに、双方の社会から弾かれている。

種族的な能力としては、人間よりすばやく、エルフより賢くはなく、人間より非力で、エルフより魔法の才はない。夜目は比較的利益くほう。

体格は華奢で、背も人間より多少低め。耳はエルフと同じだが、肌や髪の色は人間のものを受け継ぐことが多い。

その10 盗人探し

「うがー！ どこ行ったあいっううううううう！」

ずしずしと大股で裏路地を歩き回る俺。不機嫌さがわかるのか、皆そそくさと逃げていく。

『主、主。そのように構えていては聞き込みもできんぞ。怒りはわかるがまずは落ち着くのじゃ』

少し落ち着いた。

何で俺がこうなってるかと言うと、まあわかんと思うけど、人の財布をすりやがったハーフェルフの少年を探しているのだ。

『誰に向かって言っておるのだ？』

「……さあ？」

とりあえず、落ち着いて深呼吸。吸ってー、吐いてー。吸ってー、吐いてー。

『……吸ってー、吐いてー。吸ってー、吸ってー。吸ってー、吸ってー』

「……すうー、はぁー。すうー、すうー。すうー、すうー……って苦しいわボケっ!？」

お約束のボケをしてきたリアにツツコんだ。うし、落ち着いたぞっと。

『いや、それで落ち着く主もどうなんじゃ』
「言うな」

さて、そろそろいい加減に探すとしよう。

「すみません。先ほど、この辺を赤い髪のハーフエルフが通りませんでしたか？」



見かける人に片っ端から聞き込みをして、すりを追っていく。
やはり赤髪のエルフと言うのは珍しいのか、覚えてる人は多かった。だが。

「……こっから先は、大通りだな」

そう、被差別種族のすりだからスラムにいたのだと思ったのだが、どうも大通りのほうに向かったらしい。

困ったな。俺、お尋ねものなんだが。まだ染め粉も買ってないし。

『おそらく、別のスラムがあるのじゃろ。それなりに大きな町じゃし』

ふむ。そうすると、どうしたものかな。

……よし。

決断をすると、大通りには出ず、近くの人に声をかける。

「すみません、この辺に、ここ以外のスラムって近いのはどこい
辺にありますか？」

「ん？ あんた旅人かい？ スラムに用があるってことは、アレか
な？ 裏の情報とか、裏の商品とか？」

「ええ、まあ。そんな感じです」

「ここで駄目ってことは、商品のほうか。モノはなんだい、人か物
か」

「……人？」

人ってことは、話に聞いた違法奴隷、か？ 虫唾が走る話だが、
今の俺がどうにかできることでもないのもまた事実。

「人が欲しいなら、近くにそういうの扱う店があるな。別のスラム
なんだけだよ。」

ああ、法のほうは、きちんと首輪つけておけば大丈夫。奴隷保護
法が適用される正規の首輪も取り扱ってるって聞くぜ」

取りあえず、なんだな。

ふざけるな。

……

……

.....

『で、結局どうするのだ?』

気がつけば、奴隷をかるく語ってたあんちゃんはボコボコにされて倒れていた。不思議不思議。

「どうするかな。とりあえずさっき聞いた、奴隷位置のあるスラムは近いからいってみるか」

奴隷市なんて反吐が出るけど、その近くにいる可能性はあるし。



Side...???

「ふう、ここまで逃げれば安全かな」

そうつぶやき、スラムを歩く。歩きながら、懐の財布の重さを確かめた。財布――掏り取ったその財布はかなり重く、今のボクなら半年くらいは暮らしていけそうだ。

神の恵みに感謝すべきだろうか? そうは思えない。だって、神が本当に恵みを与えてくれるなら、母さんを不幸にしたりはしなか

ったはずだから。

母さんは美しかった。腰まですらりと伸びる銀の髪、絵に描いたような眉、華奢で繊細な体格。まあ、胸はちよつと残念だったけど、それはエルフだから仕方がない。そんな母さんは集落でも自慢の美エルフだったらしい。

その母さんが、森の外周に出かけたときに、折悪く複数の人間の男たちに捕まり、暴行の果てに僕が生まれた。だから、父親が誰かはわからない。知ったところで殺意しか湧かないだろう。

こうして、集落の自慢だった美しい母は、人間との間に子供を設けた、と言う理由で集落から追い出された。母さんは被害者なのに、それでも、母さんはボクを愛してくれた。お前なんか生まれなければよかったのに。そんな言葉は一度も聴いたことが無い。……自分ではたまにそう思うけど。

——その母さんも、半年前に死んだ。流行り病で、最期までボクのことを案じていた。

——あなたは、生きて。そして、幸せになって。

それが母さんの最後の言葉。

だからボクは生きる。そして、必ず幸せを見つけてやるんだ。

と、考えていたのが悪かったのだろう。どん、と、思いつき人にぶつかってしまった。

「ああん？ ガキい、てめえ何しやがるんだ？ この俺が誰だかわかってやってるんだろうな、ああん？」

げ。こいつ確か、このあたりで奴隷市開いてる親玉だ。名前は知

らないけど。

とっさに逃げようとしたが、取り巻きもいたらしい、すぐにつかまってしまった。

「ふん、この俺にぶつかるたあ、いい度胸だ。ちょうどきれいな顔をしてるガキだし、この詫びはお前を奴隷として売り飛ばすことで払ってもらおうか、ん？」

……母さん、助けて……



大通りを横切り、人目を避けるように別の裏路地へ。

さらに歩いて周囲はだんだんと貧民層的な雰囲気をかもし出す薄汚れた通りへと変化していく。

話に聞いた、もう一つのスラム。多分、ここにあのすり小僧がいる可能性が高いのだろう。

「すいません、赤い髪をしたエルフを探しているのですが、見かけませんでしたか？」

「あら？ いい男ね、どう？　うちで一杯」

「それはまたの機会に。それよりもエルフのほうなんです……」

「ああ、ごめんなさい。赤い髪のエルフ、ねえ……。ちよつと見てないわ。」

ただ、さっきあっちのほうで揉め事があったみたいよ。人が集ま
ってたから見た人がいるかも」

「ありがとうございます」

取り合えず、手近にいた女性に話しかけるが、微妙な返事。つー
か、あなたのお店に行こうにもお金がすられてます。

後お酒は二十歳^{はたち}になってから。異世界だけど。

『で、行くのかの？』

「まあ、いかないよりましだろ。途中で聞き込みしながらさ」

『なるほどの。ところで、気になってたんじゃが、あのすりを見つ
けてどうするのじゃ？』

「どうするって？ 財布返してもらうんだけど？」

『盗みは犯罪じゃ。故に、大人しく返せといっても返すわけがなか
ろう。』

盗人は、その規模にもよるが、捕まれば鞭打ちの上追放じゃ。特
に、相手は被差別種族のハーフエルフ。誰も助けんじやろうな。

さらに盗む、と言うことは、それなりに理由があるから盗むのじ
やろう。他に生きていく手がない、とかの。

さて、主。これらを踏まえて聞くぞ。見つけて、どうするのじゃ
？』

「う……」

そういわれると、どうすればいいのかわからない。

子供が鞭打ちの上追放などされれば、生きていけるはずがない。
つうか、突き出したらこっちも捕まる。何せ天下ごめんのお尋ね者
だ。

なら、返してくれば突き出さない、と交渉するべきか？ それ
はいい気がする。尤も、これはこの先彼がまたすりを働くことを許
容し、また捕まるリスクを負うと言うことだ。

ではどうするか？ 盗まないと生活できないと言うのなら、いっそ引き取って面倒を見ると言う手がある。

これならば、盗まずに生活ができるんだから、罪を犯したりはしないはずだ……って、そんな金もないし、一人くらいならどうにかなるとしても、この先似た様な境遇の人にあったら全部引き取る気か！？ 絶対に無理！

「どうしよう」

『……決まっておらんのか』

「ああ」

そうしようもないと思うが、決まってるのだから仕方がないのだ。

「取り合えず、見つけよう、それから考える。突き出さないって言うか、突き出せないんだから、それを説明すれば相談くらいはできるかもしれない」

『……甘いもう。ま、主がそう決めたのなら従うだけじゃ』



「それで、そのエルフなんですが」

「ああ、見た見た。可哀想に、ベルゼっていうこのあたりのまとめ役ともめっちゃってねえ。連れて行かれちゃったんだよ」

「それは、どういう」

「ベルゼは裏奴隷商なんだ。だからあの子も今頃は奴隷の焼印を押されてるんじゃないかな。まあ、ハーフェルフみたいだし、仕方ないっちゃ仕方ないけどね。」

君も、アレとどんな縁があるかは知らないけど、身が惜しいなら関わらないほうがいいよ。じゃ」

男性はそそくさと去って言った。多分、話したことで誰かに目をつけられたくなかったのだろう。

だが、俺は。

「見捨てられるわけ、ないだろ……！」

ただぶつかっただけで奴隷？　ふざけるな。

その10 盗人探し（後書き）

ぐあー、スランプだー！　って早っ！？　スランプに陥るの早っ！？

あ、PV18000オーバー、ユニークアクセス30000オーバーありがとうございます。お気に入りも40件を超えていてびっくりです。

よし、この声援を受けて、スランプから脱出するんだ俺……！

取り合えず、この話に奴隷や暴行と言う存在がピックアップされています。読者様によつては、気分が悪くなるかもしれません。

が、こういう闇の部分も扱ってこそそのファンタジーだと思いますので、出来れば御了承いただきたく思います。

以下いつもの。

●奴隷

人権のない人々。主に仕え、主の道具として仕事を押し付けられる。

大抵は戦犯や重犯罪者への刑罰として使われる。公において、これを認めている国、いない国がある。エルメンライヒ王国は認めている。

道具であり、人権なんてないから、どのように扱われても文句はいえないが、そもそも奴隷の購入はとても高いので、その意味ではそれなりに大切に扱われることが多い。

車を買ったから、その車をただけ乱暴に扱おうが壊そうが、そんなのは持ち主の自由だけど、普通やらないっしょ？　っていうのと同じ。

奴隷は、その証明として二の腕に焼印を押され、これを隠すことが許されない。隠していたことが発覚した場合、身分査証で重罪となる。

ちなみに、違法奴隷も存在する。

違法奴隷は、本来特殊な立場の人間を除いて奴隷にされないはずなのに、そこいらの人間を捕まえ、無理やり奴隷にしている。明確に違法なのだが、焼印を押されてしまえば区別がつかないので訴えるのが難しい。

●奴隷保護法

奴隷を守る法律。といっても、人権を守るものではない。

要は、「この奴隷はきちんと主がいるので、主じゃない人が傷つけたら器物破損で裁きますよ」と言う法律。

元々人権がない奴隷なので、この法律があることで、主以外からの暴力を回避できるようになる。そのため、奴隷制がない国でも制定されている。

主のいる証明に、奴隷は専用の首輪をつけることになっている。

その11 盗人救出

『主、^{あるじ}本当にいくのか？ 確かに相手はチンピラかも知れんが、現実は物語のように都合はよくない。

主の腕では例えチンピラが相手であっても、3人ほどにでも囲まれば勝ち目はないぞ』

「わかってるよ。だから“話し合い”に行くんだ。それならまだ目はあるだろ」

ベルゼのいると言う裏奴隷市へと歩きながら、リアと話す。

まあ、俺がやろうとしてることなんて、確かに無謀なのだ。何せ、相手はチンピラの寄せ集めとはいえ、日本で言うならヤクザ事務所に乗り込むようなもの。

違法奴隷なんて物を扱う以上、それなりの備えはしてるはずだ。でも……

「子供を見捨てるのは、ちょっとなあ」

まったく、我ながら度したがいよなあ。こういうのは飛鳥^{あすか}のキャラクターなんだけど。あいつのこと言えないな、俺も。



「ここか」

『の、ようじゃの。して主。どうやって入っていくのじゃ？ まだ商売の時間には早いようじゃが』

扉はしまっており、鍵もかかっているように見える。裏口を探すのが礼儀なんだろうが……。

「あくまで俺は“話し合い”に来たんだ。正面から堂々とたずねないのは誠意がないってもんだろ」

『ふむ。道理じゃな』

こんこん、とまずは扉をノック。人の反応はあるようで、中へ何かが動く気配がする。しかし、開ける気配はないようだ。ならば――

「すみません、先ほどこちらに赤髪のハーフエルフがつれてこられたときいてやってきたのですが、話し合いに応じていただけないでしょうか？」

ややあって、

「はっ。ここを尋ねてくる客にしては礼儀正しい奴だな。どうやら一人のようだし、いいだろう、開けてやるから入りな。確かにあのガキはここにいるぜ」

そう、返事があり、ガチャリと鍵の開く音がした。……って言うか、何でこっちが一人だってわかったんだ？

『主、先ほど2階の窓から覗いている輩がおったぞ。大方そやつが報告をしたのではないかの？』

あ、なるほど。



中に入ると、そこは酒場のような場所だった。それなりに大きなホールの奥には、ダンサーが出てきて踊りだしそうな、一段高い舞台がある。おそらくはそこで奴隷を紹介し、客は席について酒でも飲みながら選ぶのだろう。

その舞台の前に十数人のそれなりに喧嘩に慣れてそうな雰囲気の子ンピラが臨戦態勢で壁を作り、こちらを身構えている。やっぱり、警戒を崩したりはしないってことなんだろう。

舞台の上には檻があり、その中にエルフの少年がいる。俺の財布を掏^すった子だ。服の二の腕の部分は破られ、そこになにやら焼印が押してある。涙目でこっちを見つめる姿には何かそるものが……っていかんいかん。相手は男の子だ。何やってるんだ、俺。そんな腐女子が喜びそうな趣味はないはずだ！

ベルゼと思しき人物は、その檻に寄りかかってニヤニヤしている。

「ようこそ、勇敢な戦士殿。で？ わざわざ商談の前に店にやってきて、焼印を押しただけで検査もしてない奴隷を探してたのはどういうことかな？」

「そうだな。まず、その子に財布が盗まれたので、それを取り戻しに来たってのが理由の一つなんだが。それはそれとして、その子を

解放してやってもらえないか？」

「はっ、お前、それ本気？　どこの貴族のお坊ちゃんだよ、お前。世間知らずにもほどがあるだろ。冗談じゃないね。なんで折角手に入れた獲物をみすみす逃してやらないといけないわけ？」

財布の件だって、証拠とかあるの？　ないなら奴隷の持ち物だろ？　なら、そんなのは仲介する俺のモノだったの」

うわ、すごいむかつく奴だ。ぶん殴りてえ。

そんな、俺の感情に気づいたのか、

「ん？　なに？　やるのか？　いいぜ、この人数相手にその御立派な剣だけで倒せると思ってるならやってみればいいじゃん？」

そんな挑発をしてくるベルゼ。

だが、確かに俺ではこいつらには勝てない。1対1なら、何とかなる。だけど、盾まで街中で持つてるわけじゃないし、両手剣1本では2体1の時点でまず勝てない。それが概算15対1だ。

「んゝ、でもそれ、確かにいい剣だな。装飾も……ん？　お前、それ……白竜騎士団の剣、か？」

ざわり。

そんな擬音が似合うほど、空気が動いた。……確かに、そんな剣だったな、これ。

「……間違いない。鰐に刻まれた紋章は白竜騎士団の正式紋だ。つてことは、偽者だったら身分詐称になる。お前、騎士か？」

……ごめんなさい、そんなこと全然知らず使ってました。つて言うかやべえ。それじゃあこの剣持ってたら身分詐称じゃねえか。

後で紋章隠さないよ。

だが、ここではこれは武器になる可能性がある。申し訳ないが、ここは利用させてもらおう。

「……さてな。お前がそう思うならそうなんだろう。

で、そのあたりを踏まえて頼むんだが、あんたの意見はよくわかるが、ここはそれを捻じ曲げて交渉に乗ってもらえないか？

ただで譲れ、なんて虫のいいことは言う気はないが。尤も、十分な額が払える手持ちがあるわけでもないのね。そこらへんは手加減してほしい。何、元々ただで手に入れたあぶく銭だろう？ 多少やすくても交渉の余地はあると思うのだが？」

「……ふん。話のわかる奴、ってことか。どんな条件で譲れって言うのさ」

ベルゼの言い分もわかる。公式の奴隷であれば、一人買うのに大金貨が2枚は必要なほどの大金がつく。

違法奴隷の場合、違法性の隠匿に費用がかかるものの、人攫いや今日を生きるのも厳しいどん底の家庭から買い取るので、コストがかなり安くなる。だが、それでも金貨8枚は必要なのだ。

それだけの高価な品を、どれだけ値切られるか。そこが交渉の焦点となる。

「――銀貨で50。それと、あんたらのことは誰にも言わない。これどうだ？」

「……7割も値引きかよ……えげつねえな。だが、ここでお前を潰して死体を埋める、って手もあるんだぜ？」

まあ、普通そうくるよな。だからこそ、はったりで切り抜ける……！

「当然だな。だが、何も対策をしないで来た、なんて本当に思っているのか？ そんな都合のいいことを？」

本当は何も対策なんてしてませんけどね！ 深読みして交渉に応じてくれることを祈ろう。

「……ちっ。秘匿に関して、信用する根拠は？」

「念書の類を書こうか？ 王宮に持っていけば、俺がお前から違法と知りながら奴隷を買った、と証明するような奴を。それが表に出れば、お前も俺も破滅する。お前のことを伝えたら、こっちも困る、って訳だ」

そして、向こうもそれを盾に脅すことはできない。なぜなら、向こうも共犯なので、それが表に出れば困るのは同じだからだ。

ちなみに、銀貨50枚って掏られた財布の中身ほとんど全部です。

「……ふん。それが落としどころだな。いいだろう、おい、お前。紙とペンを渡してやれ。念書を書いたら、それをこっちによこすんだ。そしたら奴隷を渡してやる。金はその後払え」



「金ももらったし、契約は完了、だな。ああ、忘れてた。こいつも持っていきな」

ベルゼからエルフ少年を買い取った直後、なんか投げ渡された。

「あん？　なんだこれ？」

「奴隷保護法用の首輪だよ。まあ、偽造だけどな。宮廷付きの専門鑑定官だってきちんと調べなきゃ見抜けねえ自信はあるぜ。おかしな目をつけて調べられなきゃあ安全だ」

ふむ。別に奴隷としてつれて歩きたかったんじゃないんだけど……。

「んあ？　なんだ、奴隷としてほしかったんじゃないのか？　ただの人助けだってんなら、お前相当なあほだな」

うるさい、わかってるんだ、それは。

「まあ、焼印押した時点でどうしようもねえよ。開放したところで主なしの奴隷になるだけだ。そんなの、周りから見ればどうぞ手を出してくださいって言うようなものだろうに。」

焼印隠せば身分詐称だしな。そいつの安全を考えるなら首輪は必須だろ」

う……。そんな風にしたのはどのどいつだ、とも思うが、どうしようもないのは確かなので、こいつの言ってることは正論になっ
てしまう。

「仕方がない……。これつけるから、首出して。……大丈夫。別に本当に主になる気はないから。首輪をつけておけば、ひどい目にもあわないはずだから」

そういつて、首輪をつけようとしたのだが。

「あの……」

「ん？」

「どうして、助けてくれたんですか？　ボクは、あなたの財布を掏ったのに……」

「どうして、って言われてもな。放っておけなかったから、かな？　やっぱり子供が不幸になるのは気分が悪いよ。」

まあ、どっちかって言う気紛れみたいなものだ。今回助かったのは、ただ運がよかった、位に思ってくれればいいさ」

そう。残酷なようだが、これは本当に「運がよかった」なのだ。もちろん、捕まって奴隷になりそうになったことは不運だが、そこから助かったのは。

なぜなら、この子に特別な何かがあって、それで助けられる運命に選ばれたわけではない。子供だった、と言うくらいだろうか？　まあ、女性でも助けた気はするけど。特に美人なら。

……この子が女の子なら、より助ける気にはなったかも。男なのにぐっと来る雰囲気があるし。

「あ、あの……。なら、ボクを本当に奴隷にしてくれませんか……か……？」

——はい？

その11 盗人救出（後書き）

と、中途半端なところできつてみる俺外道！ ふーははははー！
PV2万オーバー、ユニーク4000オーバーありがとうございます！
ます。

うちの主人公は無双できるほど強くないので、今回は戦闘ではなく交渉で解決させてみました。

いつか無双できるほど強くなったら、ここを壊滅させに来たいな、
とか思わなくもない筆者ですが、無双するようになったら啓太じゃないかも……（笑）

今回はデータなしかな？ ……うん、特に思いつかない。

感想とかで「この辺の設定について聞いてみたい」とかあれば。
ストーリーのネタバレにならない範囲でお答えいたします（笑）

ユーザー登録しなくても感想かけますので、是非ください。では。

その12 奴隷契約

「あー、えーと。ナニユエニデシヨウカオボツチャン？」

思わずカタコトで聞いてしまう。いや、助けたと思ったらいきなり「奴隷にして」は誰だってそう思うって。

少年はその言葉に、一瞬なんか悲しそうな顔をするが、すぐに表情を戻して答えた。……何故に悲しそうなの？

「ええと。いくら首輪があっても、それを証明するご主人様がいないと、やっぱり身分詐称になっちゃうんです。

それに、ボク、これじゃあやっぱり今まで動揺に財布掏っていくしか生活手段ないですし……。

それでもし捕まったら、窃盗に加えて身分詐称まで加わって、今のボクの立場奴隷ですから、死刑を避けるほうが難しいと思うんです……」

ふむ。

確かに、そういう理由なら俺の奴隷になりたい、と言うのもわからなくもない。

向こうからすれば、買い叩いたとは言え自分の財布で奴隷を買えるようなお金持ちで、社会的地位のある王国の花形騎士に見えることだろう。

衣食住。その全てを与えてくれ、しかもお人よしの主、に見えるはずだ。そこまでお人好しのつもりはないんだが……。エリーといこの子と言ひ、どうも俺は年下に困ったような目で見られるのに弱いらしい。……そういえば、元の世界でも志保ちゃんにそんな目で見られてはわがままを聞いてた気がする。

……はあ、仕方がない。最後の手段にしよう。

でも、その前に。

「と、取り合えず、ここを出て話そう」

そういつて、背中を押して店を後にするのだった。



で、店を出てしばらく歩き、スラム自体も出てしまう。

とはいえ、賞金首になってる今、大通りを歩くわけにも行かないので、別の――俺らの宿があり、彼に財布を掏られた――スラムまで移動する。このあいだ無言。

「あ、あの……？　ダメでしょうか？　ボク、がんばって働きます。だから……」

さすがに無言が不安になってきたのだろう。少年はそんなことを言ってきた。

「まあ、この辺ならいいか。

それじゃあ、さっきの続きを話そうか」

「あ、はい！」

話をする、と言うことに希望を感じたのだろうか？　いきなり元

気になる少年。

「えーと。まずはこっちの話を聞いてくれないか？

全部聞いて、それでも俺の奴隷になりたい、って言うなら何も言わない。俺も覚悟を決めよう」

「あ、はい。わかりました」

そして、俺は全て話した。

騎士ではないこと。

異世界から勇者のおまけで召喚されたこと。

勇者と協力して魔王を倒さない、と言ったために余り国の連中によく見られてないこと。

城を抜け出すときに、お姫様がついてきて、そのせいで逆に国から賞金をかけられていること。

今はそれなりにまとまった金があったが、別に裕福な旅ではなく、冒険者として稼いでいること、など。

「以上だ。どうする？ 俺についてくれば、まず間違いなくお尋ね者の仲間入りだ。

かといって、安定した暮らしも保証できない。何せ俺達は根無し草の冒険者だからな。

あるいは俺たちの情報を国に売れば報奨金が貰えるだろうし、うまく交渉できれば奴隷の立場も直してもらえるかもしれない。

まあ、さすがにこれは希望的観測だけどな。それでも俺らについてくるよりは安定した立場や生活が手に入る可能性は高い。俺以上のお人好しがあの城で勇者やってるしな。

それでも——俺の奴隷になることを望むのか？」



S i d e ..???

ボクを助けてくれた青年が言ったことは、どこまでも荒唐無稽で、少しだけ夢見た甘くて平和な生活への希望なんてものはなかった。そう。確かに、彼の言葉を信じれば、今すぐにでもお城に行き、情報を渡してお金を貰うなり生活の保証を貰うなりするのが一番いいのだろう。

裏奴隷商との契約に、ボクのことは入ってない。ボクはその点において、完全な被害者で。全てをぶちまけたところで、困るのは彼と奴隷商だ。

だから、打算で未来を選ぶなら、答えなんて決まっているけれど。

「それでも――俺の奴隷になることを望むのか？」

それでも。それでもと望むなら、受け入れようと。彼は言った。

――その姿が、ボクにはとても荘厳に。あるいは神聖に見えたのから。

「それでも。我が身はあなたの下に。この命が消えるその日まで、あなたとともに歩みたい」

そう、返していた。

あるいはこの選択を後悔する日がくるのだろうか？

それでもかまわない。

たとえば後悔するとしても、打算だけじゃなく、自分がそのとき納得できる選択を。

そんな彼のあり方に憧れた。

だから、神と言うものが、運命の出会いを与えてくれると言うのなら。ボクはこれが運命の出会いだと信じよう。



……いや、なんか、ものすごく気合の入った返事が返ってきた。この気合たるや、ただの奴隷と主なんてものじゃない。

むしろ神に仕える聖職者。

あるいは、この子が女の子だったら結婚の告白にすら聞こえかねない。

……まあ、いいや。それなら。

「なら、これからよろしくな。

俺は山岸啓太。前が苗字で後ろが名前なんだ。……そうだな。こっち風に名乗るなら、ケイタ・ハルカ・ゲンヤ・ヤマギシってところか？

まあ、気軽にケイって読んでくれ」

まあ、まずは名前の交換からだよね。

「あ、はい。わかりました。ボクはクリスって言います。苗字とかは名乗ってないんですけど。」

よろしく願います、ご主人様」

うん。君の忠誠心はよくわかった。でもな？

「ご主人様、は止めてくれ。ケイでいいよ、ケイで」

「え、いえ、ダメですよ！ ご主人様を敬称で呼ばないとか奴隷失格です！ そりゃあ、ボクは奴隷なり立てですけど、それでもこのくらいの常識はあります！」

え。常識なんだ、それ。嫌って訳じゃなくて、背筋がめっちゃむず痒いんだけど……まあ、常識なら仕方ない、のか？

「まあ……。常識じゃあ仕方ないか。それじゃあよろしく。クリス」
「はい！」



「で？ 分割したお金全部使って、違法奴隷を買ってきた、と？」

帰ったら般若が仁王立ちしてました。

かくかくしかじか説明したけど収まりません。誰かボスケテ！

「いや、だ、だから、これはっ、人助けで！

事情は今話したlar……!？」

とにかく話し合おうぜお姫様。出ないと俺の命がただいまライブで大ピンチだ。

「はあ……。まあ、人助けはいいことですけど。ケイは無茶しすぎです！

裏組織に単身乗り込むとか何を考えてるんですか！ 今度やら本気で許さないですからね!？」

「ご、ごめん」

こうして、（俺の精神的なものを除き）特に問題なく、クリスの存在はエリーにも受け入れられたのだった。

おまけ。

「あ。そういえば、俺らの部屋シングルルームだったな。エリーがベッドで寝るとして、毛布もひとつだし。クリスどうするか」

「いえ、ボクは別に何もなくてもいいですよ、奴隷ですし。その毛布はご主人様が使ってください」

「奴隷ですし、とか言うな。もう俺たちは仲間だろ？」

んー。まあ、男同士だし、一緒に寝ればいいか。ちと狭いけど、

それは我慢してくれ。エリーとなら広さは大丈夫なんだろうけど、男と女だし、さすがにな」

「うええええええええ！？ い、いえ、ほんとに！ いいですよボク！ ご主人様と同衾なんてそんな恐れ多い……」

「遠慮するなって言ってるだろ？ それに、かける物もなしで寝るとか認めないからな、絶対！ これ、ご主人様命令な」

「あう……そういう言い方は卑怯です」

「卑怯でも何でも。子供を毛布すらかけずに寝させる趣味はないからな。今度そんなこと言ったら、無理やり毛布で包んで寝かせて俺が何もなしで寝るからそのつもりで」

その日、クリスはなかなか寝付けなかったみたいだけど、何でだろうな？

その12 奴隷契約（後書き）

1ヶ月もお待たせして申し訳ありませんでした！（陳謝）

更新前に確認したらPV3万弱、ユニーク5600とかいって、もうなんて読者様に不敬を……！

がんばりますので、見捨てないでね？（願

おまけに関しては、もう色々、そろそろ読者レベルならネタバレしてもいいよね、位の気分で書きました。わけわからねーって方いましたら、そのうち明言するのでお待ちください。

なんとなくそーだろーなーって方いましたら、そのうち答えを明言するので、そのときまで待つて答えあわせをしてください（笑）

今日の設定のお話。

クリスの言った、奴隷の常識、は、ほんとに常識です。なのでエリーもご主人様呼ばわりに違和感を感じません。

ただ、別に法でそうしろ、と言うのはないので、変えても問題はないんですけどね。非常識と貶される事のほどでもありません。

追記..

設定を思いっきり勘違いしてたのでおまけ修正しました。うん、ばらしますが、こいつらの部屋はツインルームじゃなくてシングルだったんだわ。

その13 ラムラドル出発

窓から降り注ぐ陽光と、スズメの鳴く声に導かれ、俺の意識は覚醒した。

体を起こしてくっつ、と伸びを一つ。体をほぐした所でふと違和感を感じた。

……右を見る。隣のベッドにエリーが丸くなって寝ているのが見える。ああ、そうだ。昨日は宿代けちって同室で寝たんだっけか。

……左を見る。目の前には壁。部屋の隙っこで毛布かぶって寝たのだから言うまでもない。目線をおろしてみる。左側には少しスペースが空いている。小柄な子——例えばエリーくらい——なら何とか寝れそうなスペースだ。

と、ここまで考えて、思い出した。ついでに違和感の正体にも気づいた。

クリスが寝てたはずなのに、いないんだ。寝るときに横にあったはずの感触がないから違和感を感じたのだろう。

「あ、おはようございます、ご主人様」

クリスのことを考えた途端に、部屋の扉を空けてクリスが入ってきた。昨日と同じ薄汚れた元は白かったのだろうTシャツと半ズボンという服装だ。……いや、そもそも寝るときもそんな格好だった気がする。荷物とかなないだろうか？ アレから直接ここに来たし。つーか、考えてみたら路上生活者なんだから荷物も着替えもないんじゃないかって気がひしひしとしてきましたよ。よし、後で服買わないとな。

「おはよ。眠れたか？」

「ち、ちよつと緊張して。でも、普段よりもずっと眠れたので大丈夫です!」

宿でベッドに寝てたからだろうか? 路上は危険だしな。

「それじゃあ、ボクは下に行つて食事の準備してきます。とはいっても食器並べるだけですけど、それでも手伝つた分少しだけお駄賃くれるそうです。銅貨1枚くらい」

皿並べるだけで銅貨1枚つて結構すごくない? と思つたのだが、後で聞いた話だと、宿中の掃除とかかなりの雑務をやつての給料らしい。いや、仕事量的に逆に安いよ。

さて。クリスは下に行つてしまつたし、俺が手伝うようなことでもないだろう。朝食まで少し時間が有る。どーするかな、なんて思つてたら、エリーがお目覚め遊ばされた。

「おはよう、エリー」

「……………おはよう……………ございますう……………」

眠そうだった。めっちゃ寝ぼけてる。もう目が眠ってる。

7割がた眠つたような状態で、それでも普段の習慣となっているのだろう。エリーはもそもそとベッドから起き出し、着ているネグリジェ^{ジャマ}に手をかけ。

「つてちよつと待て!？」

俺の制止は時既に遅く。

エリーはそのままネグリジェを脱ぎ捨てた。

その下にあるのは、一糸纏わぬ生まれたままの姿のエリー。

そう、今まで話す機会がなかったのだが、この世界、下着と言うものがほとんどないらしいのだ。

ほとんど、と言うあたりで分かるとおり、皆無ではない。いわゆるふんどしと呼ぶべき様なものは存在している。これを使うのはもっぱら兵士や騎士などの軍人階級の男性で、冒険者の男性も愛用者が多いと言う。

まあ、男はね。戦闘や乗馬なんかで激しい動きするときに“ない”と、邪魔だからね。色々と。

と、そういう理由で存在するもののため、女性には穿かない。いや、上はさらしのようなものをまいたりはするそうだが、エリーは必要がない。この世界の文明レベルだと、さらしも男同様「揺れて邪魔なものを固定するため」のものだからだ。

ちなみに、女性の下履きについても、月の物があるときだけはふんどし巻く、とは城に逗留していたときに着替えを用意してくれていたメイドさんから聞いた話である。

少しは恥らえ、メイドさん。嬉々として話すんじゃない。

それはともかく
閑話休題。

完全な不意打ちもあって、素っ裸のエリーを上から足先までじつくりと眺めてしまう。召喚された時は近すぎてきちんと見てはいなかったのだが……って、何やってるんだ、俺！ 視線がどうみても色情狂だったぞ今！

『男じゃの、主も』

ぐはっ！？ リアの声が心に刺さる！

で。そんな俺の騒ぎに、ようやく目が覚めたらしい我らが裸姫。

「……………」
「……………」

沈黙のまま、俺とエリーの目が合う。エリーは状況を認識できていないのか、無表情だ。

「……………」や、やつほー。お、おきた？」

あまりの気まずさになんとなく声をかけてみた。途端、状況を理解して茹蛸のように真っ赤になるエリー。

爆音一発。エリーが悲鳴とともに放った魔術に吹っ飛ばされ、新しい町の2日目は始まった。



その後、エリーはふくれっ面で暴力の謝罪をし、「でも乙女の裸を見たケイが悪いんです。お嫁に行けなくなったらどう責任を取るんですか」などとのたまった。

勝手に脱いだのはお前だろう、と思ったけど、それを言ったら余計に揉めそうなので黙ってた。

で、その後朝食を取り、さっさと街を出るための準備をすること

にした。まずは俺の変装用の染め粉とクリスの着替えや旅用の荷物だ。

取り合えず、クリスの荷物に関してはエリーに頼むことにした。その際に、くれぐれもエリーはフードを取らないでおくように念を押して。

いや、ぶっちゃけエリーもクリスものすごく可愛いのだ。こんな二人が並んでたら幼い子供カップルか何かとして目立ちまくることに疑いない。

一方の俺は、自分の染め粉を買い、ついでに冒険者の店で仕事を探すことにした。

国抜けを前提として、できるだけ期限のないものがある。報酬に関しては安めでも仕方がないだろう。

「仕事か。その条件だと……国抜けの配達があるな。手紙と小包だが、中身は食料とかじゃないから多少時間がかかってかまわないそうだ。」

報酬は全員で銀貨20枚。まあ、かなり安いが依頼人が特に金持ちでもない老夫婦でな。外国で暮らす孫への贈り物なんだそう。街道をまっすぐ行けばいいだけの話だし、目的の町まで2週間。まあ、指して危険な旅でもないから妥当ではあるだろうな。どうする？」

冒険者の店で聞いた仕事はそんな感じ。ぱっと聞いた限りは特に問題はない。

「どうするかな。ところで目的地を聞いてないんだけど。どこの国のどんな街？」

「おっと。これはうっかりだな。目的地は隣国ベルティア帝国だ。帝国のテリアって町だ。届け先の名前は受けてくれたらってことで」

「よし受けた」



「ベルティアのテリアですか。国としては最短ではないですね」

地図を見ながらそういうのはエリーである。現在部屋で地図を見ながらルートของ チェック。ラムラドールは王国の東端にある都市で、東、北東、南東の街道を進むとそれぞれ別の国との国境があったりする。

で、そのうち東に向かうとあるのがベルティア帝国である。国境までは約5日。北東の国境に向かうなら3日で行くので少し遠い。

「そうだな。でも、これみろよ。南東よりに進めばエリフィエルの森がある。情報屋で聞いたとおり、森を経由するならこのルートが使える。……まあ、どう考えても早くて10日はかかりそうだけださ」

「なるほど……。あ、クリスさんはハーフエルフなんですよね？森の案内と違って出来ますか？」

「あ、クリスでいいですよエリシエル様。……ボクはそのエリフィエルの森なので、案内は出来ます。けど、あそこにある、エルフの集落には出来れば……」

「……！ ごめんなさい。無神経なことを聞いてしまいました」

どういうことだろう？

『こやつはハーフエルフなのだろう？　ならば、当然エルフの集落でも迫害や差別を受けていただろう。何故森を出て浮浪者になったのかは知らぬが、つまりはそういうことじゃ』

なるほど。いや、ごめんクリス。

「あ、気にしないでください。本当に今更ですから」

「分かりました。でも、エリシエル様、なんて呼ばないでください。エリーでいいですよ。今は立場を隠してることですし」

「……それじゃあエリー様……？」

「様付けも出来ればやめて欲しい気もするんですけど……まあ、いいです。それではよろしくお願いしますね、クリスさん」

「いえ、ですからさん付けは」

「でも、これが私の素なんです。さんを取る方がいいにくいんです」

……俺のことは？　とか思うけど、止めておこう。ややこしいことになりそうな気がひしひしとする。

「まあ、いい加減はなしを戻そう。」

取り合えず、南東のエリフィエルの森を経由してベルティアに向かう。これは確定でいいかな？

「そうですね。クリスさんにはちょっと嫌な思いをさせてしまいますけど、そこは我慢してください」

「わかりました」

「国境は……森を横切って流れるこの川か。なら、この川を越えれば、俺の指名手配は無効になる……。いや、万一道中で見付かった場合は、森を出て街道に入るまでは付けねらわれると思った方がいい

いな」

「どうしてですか？ 川を渡っちゃえばよその国になるんですよね？」

クリスが尋ねてくる。

「ああ。でも、よその国だといっても、それが問題になるのは「ばれたら」なんだ。人目につかないところなら、他国の兵士が何かしても問題にはならない。犯罪を犯しても捕まらなければ裁かれないのと同じようなもんだ」

「それじゃあ……ベルティアに入ったら、逆に堂々と人目につく場所を移動するほうが安全なんですね」

そういうこと。よく出来ました。

「とはいえ、エルメンライヒが正式に国際指名手配を要請をして、受け入れられればアウトなんですよね……」

と、エリーが問題提起をする。……言うな、その嫌な未来を。

「まあ、取り合えず。出発するか。まだ朝早いし、今のうちに距離を稼ごう」

こうして、果てしなく不安な明るい未来へ向かって、旅立つことになった。

その13 ラムラドル出発（後書き）

A happy new year! ……ごめん、もうそれどころじゃないですね。

召喚時並に（下手したらそれ以上）問題のあるシーンがありました。……指定してるし。

ケイの脳内お宝画像として登録されました。……なぜか好みの異性とは真逆の魅力的な女性にばかり縁がある男……！ でもお宝画像は登録する。男だから。

おまけですが、クリスは冒険用の装備としてダガーとバックラー、かなり軽いソフトレザーアーマーを購入しました。バックラーっていうのは、あれだ。グリップ方の手荷物一番小さい盾。

ケイ一行のお財布…銅貨換算2843枚

本日の支払い…

宿代…銅貨50枚

食事代…銅貨30枚

クリスの着替え及び装備品など荷物一式…銅貨550枚

染め粉…銅貨4枚

保存食45日分…銅貨225枚

残金…銅貨換算1954枚

……冒険って、お金かかるね……。

追記…

更新した後に気づきました。PV4万、ユニーク7千おーばー！
ありがとうございます！

さらに追記..

なかなか更新できないでごめんなさい。下着に関する設定説明のところで設定ミスを見つけたため、修正しました。

その結果、部分的に設定そのものが変わったことになりましたが、筆者の脳内では最初から現在の設定のつもりであったことを明記しておきます。

……どういう勘違いをしたらあんなミスをするんだ、俺。

その14 エリフィエルの森

と、いうわけでラムラドールを出て旅を始めたわけだけど。

重い。そして辛い。

何がって、荷物が。特に保存食が。2週間で3人いるからって45日分とか買うもんじゃないね。

エリーは女の子だし、クリスは見た目からして力があるようには思えない。よって、必然的に力仕事は俺の役目になる。

と言うか、クリスは奴隷だから自分がもつ、と言ったのだが、歩き始めて5分で潰れた。エリーはもつと非力だ。論外。

そんなわけで俺が荷物持ちをしているのだが、それでも、この道中の主役はクリスだった。

何せエリーは箱入りのお姫様で、旅なんていうものは豪華な馬車と護衛と従者に囲まれるものだったわけで、当然野外スキルなんてない。リチャードさんたちと旅をしたときも役立たずだった。

一方俺はと言うと、飛鳥たちとキャンプに行った経験はあるのだが、如何せん、所詮は現代のお遊びキャンプだ。キャンプ用コンロもテントもクーラーボックスも完備していたのだから、この異世界の「道具が何もない野営」なんぞ経験がない。

さらに言えば、野営云々以前に俺は料理なんてできない。下手とかじゃなくて、やったことがない。飛鳥も同様。え？　じゃあキャンプで誰が料理してたか？　答えは飛鳥の妹の志保ちゃんである。美味だった。

おっと、脱線してしまった。話を元に戻すけど、俺とエリーはこの時点では野外スキルが0だった。しかし、この惨状を救ったのがクリス。森から追い出されて旅をした経験があるとか言うこいつは、

野外スキルがべらぼうに高かった。

うん。もしクリスを助けていなかったら、俺たち今頃餓死してたかも知れん。俺GJ。クリスGJ。

そして、ラムラドールを出てから5日ほどで、エリフィエルの森に到着した。

「ここから先は、街道には表れない強力な魔物も出ますから、気を付けてください。

とは言っても、基本的に獣の類ですので、多少騒がしくしておけば襲われません」

熊よけの鈴のようなものか……？

まあ、とりあえず。

そんな経緯で、俺たちはエリフィエルの森へと足を踏み入れた。



「っ！ 来ます！」

クリスの警告に振り替えると、体長1.5mほどもあるオオカミのようなものが数匹、襲いかかってきた。

「こいつらはなんだ!？」

「ダイアーウルフです！ 集団で獲物に襲いかかる極めて凶暴な獣で、逃げ足の遅い奴に集中して襲いかかってきます！ 噛みつかれたら骨ごと食べられますよ、気を付けてください！」

俺の質問に的確な答えを返してくれるクリス。だが、どう聞いても恐ろしすぎる情報だ。

逃げ足の遅い奴を集中して狙う、ということは、俺が盾になって立ちふさがればいいのだろう。

だが。

「ケイ、下がって！」

響いたエリーの声に従いバックステップでその場を離れる。

直後。十数発の魔力弾が通り抜け、次々に着弾。一瞬にして、ほぼすべてのダイアーウルフを殲滅した。

残り、1匹。

「助かった！ 後は任せろ！」

言って、最後の一匹に駆け寄る。ダイアーウルフの方も瞬時に仲間が殲滅されたのを見て不利を察したのだろう。すでに逃げ腰になっている。

だが、見逃して問題が起こっても困るので、そのまま駆け寄り剣を振る。

ざむ、という感触とともに、最後のダイアーウルフが倒れる。

……2週間ほど前にゴブリンを殺すのにも感傷が付きまತ್ತたのに、森に入ってから3日で随分と慣れたものだ。ちょっと自己嫌悪。まあ。この3日で、2時間に1度は魔物に襲われていればいやでも慣れる。正直寝る余裕もない。

みんな寝不足で目の下にクマができています。魔術師であるエリー

など、いい加減魔力も尽きてきているだろう。

だが、それもあと少し。国境の証である川はすぐ近くのように、せせらぎの音が聞こえる。

「もう少しだ。もう川のせせらぎも聞こえてるし、あれを超えれば、さっさと森から出るだけだ」

「そ、そうですね……。あと一息です」

「はいっ！ 頑張りましょう、ご主人様、エリー様」

疲れた体に鞭を打ち、俺たちは進む続ける。
その先に待っている脅威にも気づかず……。



Side…???

「……足跡がある。大きさからみて大柄な男一人と子供2人……。
ビングってところか」

エリフィエルの森の入り口。そこに一人の男が立っていた。

白銀の甲冑を着込んだ、立派な騎士である。背負った剣の鐔には
白竜騎士団の紋章が刻まれている。

「エリシエル姫、か。ふん、恨みはないが、俺の昇進のために役立

ってもらおうとするか……」

男はつぶやき、森へ足を踏み入れる。

それを待ち構えていたのか。そばの樹木の枝から、体長4mはあろうかという巨大な蛇が落下し、牙を向けて飛びかかってきた。

「……ハ、」

ざん、という鈍い音。音が消えたのちにあるのは、いつの間にぬいたのか、剣を振りぬいた男と、その一撃で絶命させられた蛇の死体のみ。

男は、自分を襲った愚かな蛇に嘲笑の一瞥を与えると、そのまま森へと踏み入っていった……。



「こ……超えた……？」

「あ……ハイ。ここからはエルメンライヒ王国じゃなくてベルティア帝国の領地になります」

「や、やっと一区切り、ですね……」

「……いや、息絶え絶えで喜んでるところ悪いけど、ここで終わじゃないぞ。」

まだ森抜けてないし。森抜けるまでは気を抜けないからな」

べしや、と音を立ててつぶれるエリー。

まあ、今まで魔術使いすぎた分、俺らより消耗が激しいのだろう。
……この中で一番体力ないしな。

「仕方がない。魔物に襲われたら、すぐにおろすからな。

クリス。今まで以上に警戒を強くしてくれ。不意を打たれたら対処できない」

このままエリーを倒れたままにしておくわけにはいけないので、エリーを背負いながら指示を出す。

「わかりました。

……でも、この辺ってこの森のエルフの集落に割と近いですけど行きますか？

閉鎖的な人たちですけど、一晩の宿くらいなら借りれると思うんですけど……」

「ありがたい提案だけど、大丈夫なのか？ お前を追い出した連中だろ？」

「ま、まあそうなんですけど……何人かは優しくしてくれた人もいましたよ？」

母さんの弟さんとかはいつも親身になってくれて、僕たちが追いつ出される時も最後まで反対してくれましたし」

それに、とクリスは続ける。この状態のエリーを抱えて歩くよりはましだ、と。

それに関してはフォローのしょうがない。ごもつとも、である。

「……そうだな。それじゃあ行くか。どのくらいかかるんだ？」

「あと2時間くらい、だと思います」

「よし。それじゃあ行こう」

「はい！」

「あうう……ごめんなさい……」

気合を入れる俺たちと、背中であたりとしながら謝罪するエリー。とりあえず、次の町について落ち着いたら、エリーは体力強化訓練をしよう。

俺とクリスは目を合わせるだけで、その結論に同意した。



1時間半ほど歩いた。あと30分！ あと30分で、とりあえず落ち着いて休める集落につくんだ！

とりあえず休みたい！ できればベッドで寝たい！ っていうか風呂に入りたい！ あ。でもこの世界、王侯貴族や天然の温泉なかったら風呂って習慣は基本ないんだよね……。大抵の人はお湯で濡らしたタオルで体をふくだけだとか。

日本人としては侘しいところだ。だけど、それでもいいから休みたい！

そんな気持ちで歩く俺。多分隣のクリスも同じ気持ちだろう。あと少し。あと少しなんだ！

……そんな、希望を打ち砕くように。

「ああ。見つけましたよ、王女殿下と誘拐犯一味」

そう声をかける、一人の男が歩む先に立ち塞がっていた。

その14 エリフィエルの森（後書き）

お久しぶりです。遅れてしまっただけに本当にごめんなさい。そしてこんな更新しない話にPV58000だのユニーク1万だのと大量の方にお越しになっていただき、本当にありがとうございます。

言い訳をさせていただくと、

1. 学校に通い始めた
 2. 純粋なスランプ
 3. D D F F やってた（死）
 4. T R P G やってた（死）
 5. T R P G のオリジナルシステム作ってた（死）
- このあたりが理由になります。

T R P G ってなんだ、という読者に伝えますと、T R P G っていうのはテーブルゲームの一種で、正式には“テーブルトーク・ロールプレイングゲーム”といいます。

ロープレとかR P GとかいうとドラクエとかF Fだとかを連想しがちですが、歴史的にはT R P Gの方が元祖で、ドラクエとかの方がそっちを参考に作られたコンピュータゲーム、です。

それはともかく
閑話休題。

T R P G とは、そのゲームの中の世界の住人に成りきって、冒険をしたりする遊び、ということになるでしょうか？

もちろん、ごっこ遊びとは一線を画す点としてルールがあります。ルールに基づいて冒険をし、超人的な行動が許されたりするわけですね。

住人に成りきるプレイヤーと、審判を兼用し、冒険そのものを用

意するゲームマスターによって成り立つのですが、やはり最大の魅力は、コンピュータと違って「決められた行動をとらないといけないわけではない」ということでしょう。

コンピュータゲームでは「ドラゴンを倒してきてくれ」という依頼に対し、「いいえ」と答えても「よく聞こえなかった」とかなんとか言われて強制されてしまいますが、TRPGは「ふざけんな」と一喝して踵を返すこともできます。……もちろん、行動に伴う結果は自己責任として感受をしなければいけません。

とまあ、そんなゲームがTRPGなんです。できたらネットで検索して、もっと魅力的に書いてくれる人の文章を読んでほしいところw

オリジナルシステムっていうのはそのまんま。オリジナルのルールです。割と種類あるんですね。TRPG。

今作ってるのってこの黒の幻想シリーズの舞台をイメージして作ってるので、完成させたら飛鳥たちがゲームの中でも暴れられるのかなあ……？（啓太は？）

ま、まだ未完成ですけどね。

あ、後黒の幻想の主要キャラをイラスト化計画とかしたんですよ。筆者は絵心皆無なので、「キャラクターなんとか機」っていうフリーソフトで作りました。

ご希望とかいただけたらアップしようかな。……その前にみてみんの使い方調べないとw

とりあえず、今回はもうちょい早くあげられるよう努力しますの
で今後もよろしく願いいたします。m（　　）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1242o/>

黒の幻想、白き刃

2011年9月10日14時50分発行